
猫の魔者

ルイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫の魔者

【Nコード】

N81820

【作者名】

ルイン

【あらすじ】

さまざまな部族がいる世界で、主人公の子猫コリス（ ）は生まれた。人間の言葉が話せ、それに加えて普通の猫とは思えない毛と瞳を持つコリス。 そのせいか突然、黒い髪をした人間の女にさらわれてしまう。 連れ去れた場所は、その女の家。 そこで、コリスは自分の正体を知らされる。そして、驚くような運命に翻弄されながらも、それを受け入れて様々なことを学んでいく。 そんな子猫と周りの温かな人々（猫々）で送られる修行物語。 ゆっくりと進んでいきます。

登場人物紹介（前書き）

大体の設定です。重要なキャラだけを載せていますが、いずれ話が進んでいく内に増えていくと思います。これからよろしくお願ひします。

登場人物紹介

猫の部族

* 【コリス】 (水色に銀がかった毛並みの無地。水色の瞳)

・この物語の主人公。真面目な性格で好奇心旺盛。身体が小さく、かわいらしい顔立ちをしている。

* 【グローリア】 (ツヤのある黒の無地。黒に少し近い赤の瞳)

・美しい黒猫。厳格な性格であまり感情を表に出さない。尻尾が二又に分かれている。

* 【シーリー】 (白と銀がかった毛並みの無地。銀色の瞳)

・若い白猫。グローリアの家で家事全般を担っている。とても明るくて、いたずら好き。

* 【テヴォルト(テオ)】 (こげ茶色の毛並みに、金のトラ

模様。薄茶色の瞳)

・幼いトラ猫。まだ子どもとは思えない、がっしりとした身体つきをしている。コリスと違い、攻撃的な性格。エリアスの弟子。

* 【エリアス】 (銀色の毛に、黒っぽい紺の豹模様。少し、水色がかかった青色の瞳)

・大人しく清楚な猫。テヴォルトの師匠。二又の尻尾をしている。

* 【リア】 (真っ赤な毛並みに、黒の豹模様。透明な青色の瞳)

・若いメス猫。ギルゼルトの弟子。無愛想さが目立つ。

* 【ギルゼルト】 (真っ黒な毛並みに、日に当たるとキラキラする黒の豹模様。金色の瞳)

・黒豹のような猫。リアの師匠。無愛想な性格で、二又の尻尾。

* 【フォークス】 (白と銀が混じった毛並みの無地。毛並みに反して黒色の瞳)

・年老いた毛長の白猫。二又の尻尾をしている。

* 【ミュミラン】(ミケ) (黒と茶色とオレンジの三毛。濃い青色の瞳)

・美しい三毛猫。二又の尻尾をしている。

* 【サロフィス(サロ)】 (深い青の毛並みに、濃い灰色のトラ模様。くすんだ青色の瞳)

・若いオス猫。ミュミランとは仲がいいが、恋仲というわけではない。

連れ去られた子猫

寒く冷たい夜風が、小さく広がる森の木々たちを大きくしならせた。そしてその森の中に、ポツンとたたずむ可愛らしい小さな軒家があった。煙突からは薄い煙が立ち昇り、小さなガラス窓からは暖炉の火が、暗い部屋の中を少しだけ明るくさせているようだった。

そんな街中から離れた家に、一匹の小さな子猫が、家の主人ともにもやってきた。

「うわー！取って食わないで！お母さん、お母さん！」

激しく泣き声をあげる子猫は、夜空から家に舞い降りて来た一人の女性の腕の中にいた。その女性は黒く短い髪を持ち、黒いコートを羽織^{はおり}っていた。

そして、ふわりと振動もなく着地^{ちやくち}すると、腕の中でもがく子猫を無視して家の中に入っていった。

女性は家のリビングに入ると、泣き声を上げ続ける子猫を放した。放された子猫はものすごい勢いで彼女から離れると、近くにあったテーブルの下に隠れた。

子猫はブルブル震えながら周りを見渡した。そして、暖炉の火で何倍にも大きくなった物の影が目に入ると、怖さで悲鳴をあげた。

「そこに居たいのなら、そこに居ろ。」女性はそう言うと、奥にある真っ暗な部屋へ消えてしまった。

小さな子猫は彼女が消えていく後姿をじつと見ていた。そして、えっと驚いた。彼女の着ているコートの下から、少しだけ2本の黒い尻尾が見えたのだ。

「なんで…？人間って尻尾ないんじゃない？」子猫は不思議に思いながら、好奇心で伏せていた耳をピンッと立たせた。

だが、すぐに周りの巨大な家具たちに気後れしたのか耳を引っ込めると、さっきの女性が消えていった暗い部屋を見つめていた。

先ほどまで母猫や兄妹たちと寝ていたので眠気に襲われながらもどこかに逃げる道はないかとキョロキョロ部屋を見渡した。

どれもこれも見たことの無い物ばかりで、そこにある物すべてが自分よりも遥かに大きかった。

と、周りに気がいって油断していたところに、先ほどの人間の女性に戻ってきたので子猫は飛び上がった。

不思議なことに、足音が全然しなかった。人間なのに猫みたいだと子猫はそう思った。

彼女は暖炉の前まで足を運ぶと、人間の女性にしては低い声で、テーブルに隠れている子猫に出てくるように言った。

「出て来い。安心しろ、取って食ったりはしない。」

その、口調とは違う思っていたよりも優しい声に子猫は目を瞬かせると、そろそろと這い出してきた。そして、おずおずと彼女を見上げた。女性はしゃがむと、優しく子猫の耳の後ろを搔いてやった。それに思わず目を細めている子猫に、彼女は呟いた。

「お前、名前は？私の名前はグローリアだ。」

そつと子猫はまた見上げると、暖炉の火に照らされたグローリアの顔が見えた。誘拐された時はパニックで顔を見ていなかったが、彼女の顔はとても穏やかだった。暖炉の火のせいなのか、瞳はきれいな赤色をしている。

「コリス…。」

その瞳と美しい顔にぼんやりとしながら、コリスは呟いた。

と、その瞬間。なにか温かい空気がグローリアを包んだかと思うと、目を開けたときには彼女はいなかった。その代わり、グローリアがいたところには一匹の美しい黒猫がいた。

「え？えっ？・・・グローリア？」

よく見ると、黒猫の瞳はグローリアと同じ匂いがした。目の前にいる黒猫はゆっくりとうなずいた。

「そうだ。私だ。そして私は、今日からお前の師となり親となる者だ。」

連れ去られた子猫（後書き）

いたらない点がありましたら、どうぞお知らせ下さい。

そういう点はたくさん出てくると思いますが（笑）

初投稿なので、かなり緊張しています…。よろしくお願いします。

物語を楽しく紡いでいけたらなと思ってます。マフラーを編むように。

『使用人』

ぼかーんと口を開けたコリスの耳に、ゴトンと何かが落ちる音が聞こえてきた。コリスはビクつとして、あわてて周りを見渡したがどこにも物は落ちていなかった。コリスは首をかしげた。

はあ、とため息が聞こえてきた。見ると、猫のグローリアがあきれたように、物音がした方を見ている。

「気にするな、こここの『使用人』がちよっとドジをしたただけだ。さつさと寝ろと言ったのに…まったく。」

「使用人？だれか他にいるの？」

なにか『使用人』という言葉に別の意味がこめられているような気がしたコリスは、グローリアにそう聞いた。

「シーリーという私たちの仲間だ。彼女はお前が気になって仕方が無いらしい。」

「仲間って？僕、そりゃあ普通の猫じゃないと思ってたけど…僕たちの他に仲間がいるの？」

コリスは、自分と同じように喋るグローリアを、すでに仲間だと思っていたので、僕たちと言った。

「そうだ。普通、猫は喋ったりしないだろう？それに、私たちの中には色鮮やかな毛色や瞳を持っている者もいる。コリス、お前のようにな。」

グローリアはそう言うと、じっとコリスを見つめた。コリスはドキツとしながら自分の身体を見下ろした。そこには、きれいな水色に染まった身体とその前足がちょこんと揃えてあった。そして、コリスの瞳もその色と同じように水色だった。

と、そのとき。

「こんにちは！私、シーリーっていうの！あなたって、本当にきれいな毛色をしているのね？」

突然パツとグローリアの横に現れた白猫に、コリスはビックリして宙に飛び上がった。シーリーという名の美しい白猫はその様子にクスクスと笑うと、キラキラした銀色の瞳でコリスを興味深げに見つめた。

「コリス君って呼んでいい？私の名前は呼び捨てでいいですよ！君の先輩せんぱいだけどね。」

ちよつとイタズラっぽい顔をするシーリー。コリスは目を瞬いた。

「シーリー！話をややこしくするな。」

そんなシーリーを、グローリアはたしなめた。シーリーの意味深な言い方に、コリスは首をかしげた。

「先輩せんぱいって？」

「・・・しかたない、その話は後でいい。お前には色々と話をする

ことがあるからな……。とりあえず、今日は寝よう。こっちへ来い。シーリー、念ねんのために結界をもう一度張っておいてくれるか？」

心底疲れた様子でグローリアは言つと、奥の暗い部屋へと歩いていった。

「はいはい。」グローリアとは正反対にシーリーは元気よく返事をした。

グローリアの後ろ姿を見たコリスはあつと声を上げた。グローリアの尻尾が二又ふたまたに分かれていたのだ。なんで？と思いつながらコリスはおろおろしていたが、大人しく従ったほうがいいと思いついていくことにした。

「おやすみなさい、コリス君。大丈夫よ、明日には何もかも分かりますから。」

「え？」

コリスは驚きに目を見開くと、優しく微笑むシーリーを見つめた。だが、グローリアがさっさとどこかに行ってしまうと思いつ、頭を下げた。そして、駆け足でグローリアを追った。

シーリーはそのおどおどとした姿に昔の自分を重ね、彼を優しく見守っていた。

「あっ、おやすみなさい。」

コリスは奥の部屋に入る前にハッとすると、あわててシーリーにそう言った。

「おやすみなさい。」シーリーは感心したような顔をして小声で、そっと返事を返した。

『使用人』（後書き）

【裏秘話】

実は、キャラはちゃんと事前に決めてたんですが、シリーズだけは書いている途中でポツと出てきたキャラでした（笑）

なので、使用人の名前をどうしようと思い、

そのとき見ていた某海外ドラマの登場人物から取りました（笑）

そして、なんとその人物が、女性じゃなくて男性だったりします（笑）

渋いおじさんです。結構、好きでした。

他にも、この小説を書くうえで奮闘した裏話があるので、あとがきに書いていこうかと思えます。

読みたい方はどうぞ、読んでいってくださいね。ありがとうございました。

夜の語り手

コリスはどうしたものと、おろおろしていた。グローリアが入っていった部屋に入ったとはいいが、グローリアの姿を見失ってしまったのだ。コリスは部屋をキョロキョロと見渡した。

奥の部屋は色々なものでごちゃごちゃとしていた。

机に大量に積まれた羊皮紙やうひしや、乾いたインクのおいがコリスの鼻をつんとさせた。部屋の周りには大きな本棚が並んでおり、そこから漂うカビのようなホコリくさい空気が、その雑然ざつぜんとした部屋をいつそう不気味ふきみにさせていた。

一箇所だけ、机の横にある小さな窓から月の光がこぼれており、木製の大きな机の上を照らしていた。だが、部屋の暗闇がその光を押しさえ込んでいるかのように、そこだけが明るく、それがコリスにはとても神秘的しんびてきに見えていた。

「こつちだ。」

ぼんやりとそれを見ていたコリスは、突然声をかけられて飛び上がった。そして、急いでグローリアの姿を探した。

「グローリア？どこにいるの？」

なにしろ暗闇に溶け込むような黒猫なので、コリスは夜目よめで部屋

が少し見えていても、キヨロキヨロと探す必要があった。

「こつちだ。」

もう一度グローリアに呼ばれた。だが、それはさつきよりも少し面白がっている口調だった。コリスは少しムツとすると、部屋をぐるりと見渡した。

そのとき、大きな机の下にルビーのような光が見えた。コリスはあつと声を上げた。

グローリアは、先ほどコリスが見上げていた机の下にいたのだ。机の前にある簡素な椅子かんそをすり抜けると、コリスはグローリアの前に行った。

グローリアは、毛布を巻いて出来た寝床で横になっていた。どうすればいいんだろう？と思いつつ、コリスがじつとグローリアを見上げていると突然、グローリアに首根っこをつかまれた。

「うわっ」

だが、なにもされずに静かに寝床の中へとおろされた。おろされたコリスは、その温かい寝床にとまどった。

急に眠気が襲ってきてコリスはうとうとし始めた。だが、グローリアがすぐそばにいるせいでなかなか寝つけない。そこで、コリスはぎこちなくグローリアから距離をとって身体を丸めた。だが、

「そこは寒いだろう。もっとこつちにこい。」

と、グローリアに言われてコリスは恐る恐る身体を近づけた。元々、まだ母親が恋しい年頃だったのでグローリアの温かな身体に少しだけ安心した。だが、どうにも眠ることが出来ない。無理もないことだった。今日一日で色々なことがありすぎたのだ。

「・・・まだ寝ていないのか？仕方無い。なにか話をするか。」

しばらく経つてもまだ起きているコリスを見かねたのか、グローリアはそう言った。コリスはなんだろう？と思いつながら顔を上げた。

「この世界にはさまざまな部族がいる。犬の部族や蛇の部族…他にもいるが、その中に猫の部族という部族がある。」

その部族の中には、『魔者』と呼ばれる戦士がいた。その戦士は戦いの中にいる限り、年を取るということを知らない。つまり、不老になるのだ。

そして、その戦いの中で50年生きた『魔者』たちは尻尾が二又になり、あることを命じられる・・・。」

「えっ、グローリアも『魔者』なの？だから、50年も生きたから尻尾が二つあるの？」

グローリアの尻尾が二つに分かれていることを思い出したコリスが、さつきとは違って変わって興奮気味に聞くと、グローリアはうなずいた。

「ああ、そうだ。私は150年生きているからな……。話を戻すぞ。二又になった猫は弟子を持つことを許され、そしてある晩、夢を見る。小さな子猫がこの世に生まれる夢を。」

コリスはグローリアが150年も生きていることにビックリしたがそれ以上に、聞かされた話が、コリスにとって衝撃的なことだった。コリスはグローリアをじっと見上げた。グローリアは、コリスを赤い宝石のような瞳で静かに見下ろしている。

「私たち猫の部族のすべてが、部族の者から生まれるわけじゃない。そのほとんどが、普通の猫から生まれてくる。その子猫たちを部族の一員として立派に育て上げるのが、私たち二又の猫に命じられた使命なのだ」

グローリアは、そこで話し終えた。コリスは謎が解けたような顔をしてグローリアを見ていた。

「じゃあ、グローリアは僕が生まれる夢を見たの？僕が猫の部族だったから、グローリアは僕をここに連れて来たの？」

「ああ。猫の部族は普通の猫として生きることにはできないからな……。家族と引き離したことはすまないと思っている……。だがその代わり、私がお前を守ると誓おう。この家にはお前を傷つけるものはいない。だから安心して眠れ……。」

グローリアは優しくそう言うと、コリスを引き寄せた。

夜は更^ふけてゆく。

自分の運命を聞かされた子猫は、素直にその運命を受け入れた。
そして、新しく自分を見守ってくれる者のそばで、子猫は深い眠り
についた。

夜の語り手（後書き）

【猫の魔者を作るうえでの裏話】

こんにちは！読んで下さり、ありがとうございます。今回はコリスのことを書くこうと思います。

実は、コリスの名前はすぐに決まったわけではなくて、何回か名前を変えてコリスになりました。

最初は名前の頭を「ク」か「コ」にしたくて「クルト」とかそういう名前にしたと思います。でも、なんとなくピツタリなくなって止めました。

「コニス」とかもあったんですがボツになり、「コア」という名前がピタッ！と当てはまったので、途中まではそれがコリスの名前としての最有力候補に上がってました。

本気でこれにしようと思ってたんですが、改めて見ると名前が2文字というのがしっくりこなくてボツに（なんだそりゃ

それで、候補にあった「コリス」という名前がいいなと思いそれにしましたのです。

グローリアはすぐに決まったのに、コリスの名前は本当に悩んだ記憶があります……。

まあ、どうでもいいんですけど・・・。

ここまで読んでくださりありがとうございます！

朝の出来事

風が、木に咲いた白い花を散らした。その風に舞った一枚の白い花びらが、開け放たれた窓からユラユラと部屋へ迷い込み、コリスの鼻の上に舞い落ちた。

「へっくしゅんっ！」

自分のくしゃみで目が覚めたコリスは、寝ぼけた目でぼんやりとあたりを見渡した。隣を見ると、グローリアがいた場所は空っぽで冷たくなっていた。

ひよっこりと寢床から頭を出したコリスは、朝の光にうつすらと照らされた部屋を見た。おぼつかない足取りで寢床から出ると、寢癖のついている水色の毛をふるふると振って、付いていたホコリを落とした。

「グローリア？どこ？」

小さく呼んでも、部屋はしんとして返事がない。ホコリの付いているカーペットの上をトコトコと踏みしめながら、コリスは奥の部屋を出た。

「わっ！」

リビングに入ったとたん、突然目の前にシーリーの顔が飛び込んで

きて、コリスは驚いて尻餅ししもぢをついた。

「おはようございます！コリス君。昨夜はよく眠れましたか？なに分からないことがあったら、なんでも言ってくださいね！」

朝からハイテンションのシーリーについていけないコリスは「わ、分かりました。」とどもりながら言った。

「あ、あの！グローリアはどこですか？」

なぜかシーリーの使う敬語がうつたらしく、どきまぎしながらコリスはそう聞いた。シーリーは白い毛並みを波立たせて笑うと、優しく微笑んだ。

「グローリアは今出かけてていないんです。でも、もうすぐ戻って来ますよ。それまで、朝食にしましょう！」

元気よく立ち上がったシーリーにつられてコリスも立ち上がると、二人はテーブルの方へと向かった。

「あ、ちょっと待っててね。私、変身しますから！」

「えっ？」

突然、シーリーはそう言うのとコリスに背を向けた。よく分からないコリスは首をかしげるままだ。シーリーはなにやらぶつぶつと咳くと、温かい空気がシーリーの周りに渦巻いた。コリスはどこか、

その感覚に身に覚えがあった。

と、そう感じた瞬間。いきなり目の前に一人の人間が立っていた。後ろを向いているので、スカートから出ている白い尻尾が見える。

「え………シーリー？」

コリスは、細い身体に茶色のエプロンを着ている人間の娘に声をかけた。彼女は振り返ると「あたりです！」と、嬉しそうに銀色の瞳を輝かせた。猫のときと同じで髪の毛は白だった。細長い絹のようなその髪を、後ろでひとつに結っている。

「どうですか？猫の部族は大人になると、人間の姿にもなれるんですよ！だから頑張りましょう！」

なにを？と聞く前に、シーリーはさっさとリビングの隣にあるキッチンへ行ってしまった。

コリスは色々と聞きたいことがあったのだが、シーリーが「朝食を食べながら話しましょう！」と言うので、おとなしくテーブルの上で待っていた。

もちろん、コリスはテーブルが高すぎて登れない。ので、シーリーに抱き上げて乗せてもらったのだ。

薄茶色のスカートをヒラヒラさせながら、楽しそうに朝食の準備をしているシーリーを見て、コリスは気持ちが落ち着いていくのが

分かった。グローリアが言っていたように、この家の住人はコリスを拒絶するのではなく、歓迎しているのだとコリスは思ったのだ。

緊張の色が薄れて、穏やかな顔のコリスを見たシーリーは、ほっとしたように顔を和ませた。そして、二人はにっこりと和やかに笑い合った。

少し経って、シーリーが朝食を持ってテーブルに戻ってきた。にぼしとミルクが入った皿をテーブルに置くと、立ったまま手を腰に当てた。

「さあ、出来ましたよ！食べましょう！」シーリーが元気にそう言つと、突然ふつと姿が消えてしまった。

「ええっ！？シーリー？！」コリスは突然のことにビックリしながらシーリーを呼んだ。

すると、シーリーがいた場所から、真っ白な猫がテーブルの上にジャンプしてきたので、コリスは驚いて「わっ！」と飛び上がった。

テーブルの上に座った白猫のシーリーは、いたずらっ子の顔で嬉しそうにペロリと舌を出した。

朝の出来事（後書き）

【猫の魔者を書く上であった裏話】

こんにちは！今回は「猫の魔者」の題名について話します。

実は、この題名は最初に考えていたのと少し違っていました。

最初は「コリスと猫の魔者」にする予定だったんですが、ちょっとあの有名な本が頭に浮かんだのでやめにしたのです（笑）

でも、この小説の題名は「コレ！」というふうにすぐに決まったので、この題名はけっこう気に入っています。

ではでは、ありがとうございました。

儀式の話し

「ねえ、シーリー。さっき、大人になれば人間に変身出来るって言ってたよね？どついうこと？」

温かいミルクで口の周りのを白くしたコリスは、煮干しを食べているシーリーにそう尋ねた。シーリーはコリスを見て、ぷつと吹き出した。

「まあまあ、坊やったら。お口の周りが真っ白ですよ。」

シーリーはそう言うと、示すように自分の口元を舐めた。コリスはあわてて口の周りを舐めた。

「で、どうなの？」取り繕うようにコリスは言った。

「ふふふ。えーと、猫の部族はですね、大人になるとその証として儀式を行つんですよ。そうすると、魔力が上がったり目の色が変わったりして、大人の仲間入りになれるんです。」

「えっ、目の色が変わるの？どんな風に？」

コリスは興味津々でシーリーに聞いた。

「例えば、茶色から黄色とか青色から緑色に変わったりするんです。ちなみに私は薄い水色でしたが、儀式をしたら銀色になりました。」

シーリーは嬉しそうになぜか胸を張った。その姿をぼけっとして

見ていたコリスは、ハツとした。

「じゃあ、僕も水色だから儀式をすれば銀色になるのかな？」

「あ、いえ。そうとは限りませんよ。みんなそれぞれ瞳の色が違うように、儀式後の変化も違いますからね。それがまた面白いんですよ。コリス君は変わるなら、どんな色がいいですか？」

急に聞かれてコリスは戸惑った。

「・・・うーん・・・分かんないや。ところで、人間になれるようになるのは、その儀式で力が上がったたりするから？」

コリスは考えながら聞いた。

「それもありますよ。変身するにはたくさんの魔力を使いますからね。でも、人間になるためには人間の身体が必要なんです。だから、その儀式で身体をもらうんです。」

「も、もらっ？！！ゲホッ…ゴホゴホッ」

コリスはビツクリしすぎて、食べていた物を飲み込んでしまった。

「大丈夫ですか？！落ち着いて下さい、コリス君。そんな変なことじゃないですから。」

「……十分変だと思うけど……。」

コリスはボソリと呟いた。シーリーはコホンと咳払いをしてまた話を始めた。

「えっと、人間の身体をもらってというのは、その・・・人間を殺すとかそういうのじゃないですかね。作るんですよ、儀式の前に」

「えっ？それって作れるものなの？」

コリスはきよとんとした。

「はい。とは言っても、その弟子の身体は師匠が作るの、私は詳しく知らないんですけど・・・。ちなみに、身体を作るには本人の毛が必要になります。」

まじめな顔でそう言ったシーリーは、棚の上に置いてあるデカイ鉄のハサミをちらっと見た。シーリーの視線を追ってその恐ろしい姿を初めて見たコリスは、ゾツと体中の毛を逆立てた。

「まあ、切るときはそう痛くありませんし、目を閉じていればなんて事はないんですが・・・でも私は数日間逃げ回っていました・・・」

ぼそつと呟かれた言葉に、コリスは思わず笑ってしまった。

「あれ？でも、シーリーの師匠って誰なの？」

コリスは、はたと思いついて聞いてみた。シーリーは、それを聞

いてなぜか笑った。だが、シーリーの言葉を聞いてコリスは酷く驚いた。

「グローリアですよ。私はグローリアの3番目の弟子なんです。そして、コリス君はその次の4番弟子。私は、君の先輩でもあるというわけなんです。」

儀式の話し（後書き）

【猫の魔者を書く上であった裏話】

こんにちは！ルインです。

そろそろ裏話がつきて来たので、次からは「猫の魔者」の世界設定やら部族の詳しい説明やらをやっていきたいと思います。

とりあえず、今回はグローリアの裏話を書こうと思います。

実は、グローリアは最初、明るい人でした（笑）

酒が好きで、酒屋にいそうな酔っ払いのセクシーな女性だったんです。

元気があつてたまに古臭い言葉を使う、そんな設定でした。

今のグローリアとまるっきり正反対ですね（笑） その元気はどうやら、突然ひょっこり出てきたシーリーに全部持っていかれたらしいです。

で、元気で明るいシーリーの変わりに、クールで落ち着いたグローリアが出来たんですね。

では、読んでもらいありがとうございました。

二人の弟子

「シーリーってグローリアの弟子だったの?!それよりも僕が4番弟子?僕たちの他にもいたっていうこと?」

コリスは混乱していた。

「そうですよ。私の前にあと二人いたんですけど、もうその二人はこの世にいないんです……。いつか、グローリアから聞いて下さいね。」

そういって、シーリーは少し悲しそうな顔をした。

「そうなんだ……。でも、どうし」

「なんの話だ?」

コリスの言葉は、他の声でさえぎられてしまった。パツとシーリーの横に現れた猫のグローリアは、気まずそうに目をそらしている。シーリーをじろりとにらんだ。

「あ……。私はちょっと朝食の後片付けを……………」

そう言ってテーブルを降りようとしたシーリーを、グローリアは止めた。

「待て、シーリー。どこまで話した?」

静かな、だが鋭い口調のグローリアにシーリーは身を縮めた。シーリーは分の悪そうな顔をして少し頭を下げた。心なしか、シーリーのピンとしたヒゲもしょんぼりとたれているように見えた。

見かねたコリスが口を挟んだ。

「あの、儀式のことです。僕がどうして人間の姿になれるのって聞いたから……。だから、シーリーは悪くはないです。」

コリスは耳を伏せながら言った。グローリアが怒っているように見えたからだ。

それを聞いたグローリアは「儀式か……。」と目を閉じながらうなった。

コリスはシーリーに近づくと、こそっと小声で聞いた。

「……ねえ、シーリー。もしかして、グローリアすごく怒ってる？僕が儀式の話聞いたから……。」

シーリーは微笑むと、身体の小さなコリスに合わせるように身がかがめて、そっとささやいた。

「大丈夫ですよ。グローリアはめったに怒ったりしないですから……。」

それに、コリス君を咎めているわけじゃないんですよ。今の時期は、コリス君は何でも知っておいた方がいいですから、好奇心旺盛なのは逆にいいことなんです。」

「えっ、じゃあ、なんでグローリアはうなってるの？」コリスは不思議そうに聞いた。

てつきり、グローリアがうなったのは凄く怒ってるからだと思ったのだ。

「それは、私がグローリアの居ない間にコリス君に、いろいろ教えてたからですよ。グローリアはコリス君に色んなことを教える義務きぎむがあるんです。それを私が勝手に」

「・・・もうその話はいい。とりあえず。シーリー、私のいないところでコリスに余計なことを話すのは止める。」

グローリアがうんざりした様子で話しを切ると、シーリーに釘をさした。

「はい。反省しております。」

そう言いつつ、シーリーはペロリと舌を出した。それを目ざとく見つけたグローリアは、鼻にしわを寄せた。コリスはポカンとした。

朝食をすませたコリスは、グローリアに言われて眠った奥の部屋へと行った。

歩くたびに舞い上がるホコリにゲホゲホとむせながら、コリスは朝よりも明るくなっている部屋を見渡した。

昨夜は暗くて気づかなかったが、クモの巣が部屋のあちらこちら

に張られているのが見えた。

前を歩いていたグローリアはコリスにその場で待っているように言うと、一瞬で人間の姿になった。その時に吹いた不思議な温風のせいで、部屋中のホコリが舞い上がってコリスはホコリだらけになっってしまった。

「うわ！へつくしゅん！」

キレイ好きのコリスは、あわてて身体を振ってホコリを振るい落とすが、グローリアは大して気にしない様子だった。本棚から取り出した本をただ黙々と読んでいる。猫というのはキレイ好きが多いはずなのに。本当に猫なのかと疑いたくなったコリスだった。

「グローリア……？僕、このままだと白猫になっちゃいますよ……げほっ。」

「……そういえば敬語だな。昨日は使っていなかっただろう？」

てんで違うところに気付いたグローリアはふと顔を上げて言った。

「え、えーと。今日の朝、シーリーと話してて移ったんです。たぶん。」

ゆっくりと落ちてくる大きなホコリを避けつつ、コリスはそう言った。グローリアはそれを聞いてふっと笑うと、読んでいた本から顔を上げた。

「そうか。この家に少しは慣れたようだな。お前が慣れるかどうか心配していたんだ。だから、そうなって私も嬉しい。」

美しい顔をした人間の女性は、優しく目を細めるようにそう言った。コリスはそれを見て、くすぐったそうに身体をもぞもぞさせた。

二人の弟子（後書き）

【簡単な世界設定】

今回は「猫の魔者」の世界設定について少し話したいと思います。

この世界には色々な部族がいて、その部族同士は争っています。

一つの国に一つの部族がいて、人間と一緒に暮らしています。力のない人間は部族を中心に生活しており、部族がその国を治めます。

文化は部族によって違いますが、あまり進んでません。田舎です。ヨーロッパ風の家が並んでおり、大自然に囲まれています。

でも、歴史はありません。魔法があるせいで、文化があまり進んでないのかも知れません。

ありがとうございました。

猫の部族

大量の本を積み重ねたグローリアは、それを全てリビングのテーブルへと運んだ。

コリスもグローリアと一緒にリビングへ戻ってきた。そのとき、カーペットの上に座っていた白猫の姿に気付くと、近寄って行った。そして、小声でささやいた。

「ねえ、シーリー。どうして、あの部屋だけ汚いの？」

リビングやキッチンを見る限り、どこもピカピカできちんと生理^{せいり}整頓^{せいとん}されているので不思議だったのだ。すると、白猫のシーリーは苦笑しながら言った。

「ああ、あの部屋はグローリアの書斎^{しよさい}なんですけど、私がそこを掃除しようとする、いつもグローリアが止めるんです。」

「どうして？」

キレイ好きなコリスは本当に不思議そうに首をかしげた。

「うーん・・・どうしてかは分かりませんが、グローリアはあのままの方がいいみたいなんです。」

シーリーは心底^{しんたい}困ったように苦笑した。コリスはよく分からずに、また首をかしげた。

その後、グローリアに呼ばれたコリスは、大量の本が積まれたテーブルに乗^のつけられた。白猫の姿のシーリーも興味津々でテーブルに上ってきた。

グローリアはテーブルの椅子を引くと、少しだるそうに椅子に座った。コリスは何かが始まる予感がしてドキドキした。

「とりあえず、私はお前に色々なことを教えなければならぬ。だが、その前に自分がどういう部族に属しているのか知る必要がある。」

緊張しているコリスに、シーリーは「大丈夫ですよ。」と言って安心させた。うん、と頷いてみせるコリスに、グローリアは構わず話し続ける。

「まあ、まずこれを見る。」

とグローリアは、積み重なった本の中から薄い一冊の本を抜き出した。それは絵本だった。可愛らしい色んな動物のイラストが表紙に描かれている。

コリスは興味深々でその絵本を見つめた。

「これには、この世界にいる部族の説明が“分かりやすく”書かれている。とりあえず、他の部族のページは飛ばして、猫の部族のところを見るぞ。」

グローリアはパラパラとページをめくっていった。コリスは背伸びをして他のページも見ようとしたが、残念ながらよく見えなかった。

グローリアは手を止めると、開いたページをコリスに見せた。そこには、キレイな黒猫と黒い髪の人間が隣りあわせて描かれており、文字が付け加えてあった。

「読むぞ。」

『エンブランという小さな国には、とてもキレイな毛並みをした猫たちの部族がいます。その部族はとても魔力が強く、【猫の姿】と【人の姿】の両方を持っている珍しい部族です。」

猫の部族は列強れつきょうの一つで、その中でも特に最強と言われています。特に、『魔者』と呼ばれる部族の戦士たちは、特別な儀式をすることで年をとらないと言われ、死ぬまで戦い続けると言われています。』

「列強れつきょうって??」コリスは思わず口を挟はさんだ。

「全ての部族の中で、特に戦闘能力が高い部族のことだ。それらを総称して『列強』と呼んでいる。」

「はあー。すごいんですね僕たちって。」

コリスは関心かんしんしたように言った。それを聞いたシーリーは、素直

なその感想にくすりと笑った。

「続けるぞ。」

『猫の部族は様々な色の美しい毛並みを持っており、それはどれも色鮮やかで一種の宝石と言われています。』

そして猫の部族は総じて美しい容姿の者が多いので、全ての部族の中で1、2位を争うほどの美しい部族だと言われています。

ですが、他の部族よりも圧倒的に数が少ないので、エンブラン国
のほとんどは人間といわれています。

受けた恩は必ず返すと言われている彼らは、とても愛国心が強い
ので、国を守ろうという意思が強いです。』

そこでグローリアは口を閉じた。読み終わったようだ。

「ここには書いてなかったが、もう少し詳しく言つと我われの部族
は数が少ないわりには団結心がありません。」

「え、どうしてですか？」

コリスはきよんとしている。

「我われの部族はマイペースな性格の者が多いからな。特に戦つと
きは、いつもバラバラで戦っている。」

「えっ、そんなんですか？」

「でも、仲間意識はちゃんとありますよ。みんな個性的ですけど仲良いですし、『魔者の街』に行けばコリス君にもよく分かりますよ。」

シーリーはにぎやかに言った。

「『魔者の街』？」コリスは聞いたことのない名前を聞いて、好奇心で目をキラキラさせた。

グローリアは、人から黒猫に姿を変えるとテーブルの上でゆつたりと横になった。二又の黒い尻尾がときどき揺れている。

「我われの部族が住んでいる街のことだ。人間の住んでいる都市の中にある。だが、あまりにも小さすぎて人間も一緒に暮らしているようだ。」

「普通に人間たちも行き来してますしね。にぎやかな街ですよー。」

シーリーもニコニコして言った。コリスはそんな場所を想像したが、あまり外に出たことがなかったのでなかなか難しかった。

「あれ、でもなんで『魔者の街』って呼ばれてるんですか？」

コリスはふと気がついたように言った。

「それは、昔にあったことが関係しているな。」

グローリアがなんとなく気だるげに言った。

「昔は、猫の部族の街なんて無かったんですよ。でも、部族の戦士である『魔者』たちが人間の代わりにこの国を守っていたので、人間たちがお礼のつもりで『魔者』のために作ったんです。」

「そういうことがあって、今でも『魔者の街』と呼ばれているんだ。」

猫の部族（後書き）

【今回は補足について】

最後の『魔者の街』についてですが、全ての猫の部族がそこに住んでいるというわけじゃないです。

グローリアのように、故意に都市から遠ざかったところに住んでいる人たちもいるので、そこは補足しておきますね。

あと、分からないことなどありましたらどうぞ、遠慮なく質問して下さいね。出来るだけ分かりやすく書いているつもりですが、「ん？」って思ったことがありますら感想にお書きください。

よろしくお願ひします。ありがとうございました。

コリスの好奇心

その後、コリスはグローリアから別の部族のことも教えられた。

「前にも話したと思うが、この世界には部族がたくさんいる。基本的に一つの国に一つの部族が住んでいて、部族は他の部族を嫌う。」

「どうしてですか？それに、他にはどんな部族がいるんですか？」

コリスはわくわくして聞いた。

「隣のアシル国には、魚の部族が住んでいる。海に面した大きな国で、持っている海の面積も大きい。」

私たちはエンブランという国に住んでいるが、この国は海に面していないからな。だから、たまに海でしか手に入らない物をアシル国から輸入したりしている。」

「へー、そうなんですか。魚の部族って…、一体どんな人たちなんですか？なんか想像つかないですけど…。」

「まあ、そうだろう。簡単に言うと、あの部族はあまり頭がいいとは言えない。」

攻撃的な面もあるが、普段は自由気ままな部族だ。海を溺愛して
るやつらで、ヒレや獣けもののような瞳孔を持っている。」

「え？ヒレ？」コリスはぎよつとした。

「ああ。耳の代わりに、顔の横に大きなヒレが付いているんだ。肌の色は、銀が青に近いな。全体的に体格がガツチリしている者が多いが、女のほうはそうでもない。」

「魚の部族の女性は、とつてもセクシーなんですよ。スラツとしていて、ピッチリした服を着てますからね。胸もポインですし。」

「ポイン？」

コリスは言葉がわからずに首をかしげた。

「反対に男はみんな筋肉ムキムキで半裸だがな。」「グローリアは遮さえぎるように言った。

「腕力も、他の部族の中で一番強いですからね。」「

シーリーはクスクスと笑いながら続けた。

「だが、その代わりに魚の部族は魔力がほとんどない。」「

「そうなんですか？そういえば僕たちの部族は魔力が多いんですよ？正反対な部族もいるんだ……。」「

「コリス君は猫の部族にしては好奇心旺盛こうきしんあつせいですよね。」

シーリーはニコニコしながら突然そう言った。コリスは急にそう言われて戸惑った顔をした。

「えっ、それって変なことなの？」

「いえいえ。私たちの部族は無関心の人が多いので、コリス君みたいに色んなことに関心を持つ人が珍しいんですよ。」

だから、逆に嬉しいんです。そういう人が増えることが。」

シーリーはさっきよりも顔を輝かせながら言った。

「そうだな。コリスのようなやつがいると、我われの部族にも色々な情報が入って来やすいだろうからな。」

グローリアは優しい目でコリスを見た。期待のこもった目で二人に見られて、コリスは口をへの字にして困った顔をした。

「そんなに期待しないで下さいよ……。それに、情報とか外の世界のこととか、まだ良く分らないです。」

居心地悪そうにしているコリスを見てシーリーは笑った。

「ふふっ、まだそこまで考えなくていいんですよ。これから、ゆっ

くり進んで行けばいいんです。」

「そうだな。ゆっくり学んでいけばいい。だが、将来が楽しみだ。」

グローリアも口角が少し上がっていた。コリスはよく分からない期待の大きさに身を縮めた。

コリスの好奇心（後書き）

【猫の部族と他の部族の違いについて】

読んでくださり、本当にありがとうございます！心から感謝しています！

今回は、「魚の部族」という部族が出てきたので、

「猫の部族」と他の部族の違いをちょっと詳しく書こうと思います。

この世界には、たくさんの部族がいるんですが、大抵は人の形をしています。

「猫の部族」のように『動物の姿』と『人の姿』の両方を持っている部族は非常に珍しいです。

あと、「猫の部族」は“普通の猫（部族じゃない猫）”や同じ部族の者から生まれますが、

他の部族は違います。

他の部族は、部族の者からしか生まれないので、ある意味「猫の部族」は特別なんです。

分かりにくくて本当にすみません（汗）

何か分からない点があればどうぞ、遠慮なく聞いてくださいね。では、ありがとうございました。

シーリーの生い立ち

三人はテーブルを囲んで昼食を食べていた。

シーリーとグローリアは二人とも人間の姿で、赤いソースの付いた細い紐のような食べ物食べている。

コリスが食べているのは、なんだか色んな物を混ぜたようなドロドロとしたご飯だ。どれもシーリーの手作りだ。

見た目はドロドロしているが、子猫のコリスにとっては最適なご飯なのでお腹を壊すことはない。味もおいしい。

なので、コリスは黙って食べていた。

「それなんですか？見たこと無いですけど。」

コリスは自分のものと違う、二人の食べ物に興味を引かれた。

「これはスパゲッティーだ。人の姿になると、色々なものが食べられる様になるからな。なかなか美味だぞ。」

グローリアが、フォークにスパゲッティーを巻きつけながら言った。

「ふふつ、ありがとうグローリア。人間って色々なものが食べられますから、飽きないんですね。それに、人間の食べるものって美味しいものが多いし、作るのも楽しいですよ。コリス君も儀式が終わったら作ってあげますからね。」

シーリーは、作った料理をグローリアに褒められて嬉しそうだ。コリスも、じーっと二人の食べ物を見てクンクンと鼻を動かした。

「うん、ありがとうシーリー。そのときはこれ作ってね。ところで儀式っていつあるんですか？」

コリスはツバを飲み込みながら、ふと思ったことを聞いてみた。

グローリアはもぐもぐと食べながら、

「今から20年後だ。」と言った。

ぶつとご飯を噴出したコリスは、あわててグローリアを見た。

「に、20年後?!」

「安心しろ。あつという間だからな。それに、修行期間は20年と決まっている。」

てんで的外れなことをグローリアに言われて、コリスはぐるりと反対側にいるシーリーを見た。すると、シーリーは笑いながら、

「大丈夫ですよ。猫の部族の平均寿命は長いですから。20年後は、コリス君は立派な青年になってますよ。それに、グローリアが言うてるように20年なんてあつという間!です。」

シーリーはそう言った。

「そうかな……。なんか20年って想像つかないけど。」

コリスにとって、20年はとてつもなく長い時間に思えた。

すると、単純な疑問が浮かび上がってくる。

「猫の部族の平均寿命っていつくなんですか？」

「約100年だな。『魔者』以外は老いもするし、色んな職にも就く。機会があれば結婚もできるかもな。」

グローリアはのんびり食べながらそう言った。

「あの、じゃあ普通の猫はどれくらいの寿命なんですか？」

「……。大体、20前後だな。中にはもう少し生きる猫もいるが・
」

「僕たちよりも随分すいぶんと寿命が短いんですね……。」

どこか暗くなったコリスを、グローリアは少し悲しそうな目で見た。

コリスは自分を産んだ母猫と兄妹たちを思い出していた。コリス以外全員、普通の猫だった。だからコリスは、自分だけ長生きする

ことに少し寂しくなったのだ。

シーリーは暗くなったコリスを見て、きよとんとしていた。それを、グローリアが目でたしなめたが、仕方が無いとため息をついた。シーリーには、コリスがどうして猫の寿命のことで落ち込んでいるのか分からないのだ。

それは、シーリーの生い立ちのせいでもあった。

コリスが生まれるずっと前、グローリアは白猫が生まれる夢を見た。シーリーの夢だった。そして迎えに行ったとき、シーリーは母猫から捨てられて酷いありさまだった。

息も絶え絶えで、寒い季節のせいかえらく体が冷たかった。げっそりと痩せ細り、死ぬ寸前だった。地面に倒れているシーリーを見つめるやいなや、グローリアは血相を変えて家に連れ帰った。その日から、グローリアはしばらく一晩も寝ずにシーリーを看病していた。

そして、シーリーが目を覚ましたとき、グローリアはシーリーに記憶がないことが分かった。道端に倒れていたことも、死にそうだったことも全く覚えていないのだ。グローリアは悲痛な思いで、シーリーに死にかけていたことを打ち明けた。

だが、シーリーは信じようとしなかった。そして、グローリアの

ことを「お母さん」と呼んだのだ。グローリアは諦めて、シーリーが受け入れられるようになるまで大きくなるのを待った。

そして、大人になったシーリーにグローリアは本当の母親ではないことを告げた。シーリーは少しショックを受けたが、それでも今でもグローリアのことを母親のように思っている。シーリーがグローリアから離れず、未だに一緒に暮らして家の家事を受け持っているのはそのせいだった。

少し話しが逸れたが、つまりシーリーは普通の猫に対する特別な思いがないのだ。シーリーは普通の猫から生まれたにも関わらず、コリスのような記憶がないので、別に普通の猫と寿命が違うことになんとも思わないのだった。

そのことに、グローリアはずっとなんとも言えない気持ちでいたのだった。

シーリーの生い立ち（後書き）

【補足】

出しそびれましたが、シーリーの名づけ親はグローリアです。

そして、今回はそんなに補足するところがないので、また次回！

いつもながら、読んでくださってありがとうございます。

恋愛ごと

「・・・あ、それよりも結婚があるんですね。」

コリスは気を取り直して、明るく言った。

「はい、みんなめつたに結婚しないですけどねえ。私も、このまま行けば結婚しないかもしれないです。でも、もし子供が産めたら絶対『魔者』になって欲しいんです！私はなれませんでしたからね。」

シーリーはそう夢見がちに言った。銀色のキラキラした瞳が、もつと輝いて見えた。

コリスは、ん？と首をかしげると、シーリーを見上げた。

「あれ？シーリーは『魔者』じゃないの？じゃあ、どうして『魔者』にならなかったの？」

そのことに、シーリーはクスリと笑うと困ったように肩をすくめた。

「私、戦いに向かなかったんです。」

「『魔者』は戦士だからな、性格に向き不向きはある。シーリーは戦うというよりも、こういう仕事のほうが向いていたんだ。」

グローリアが説明した。

「そうなんですよ。以外と多いんですよ？私みたいに『魔者』じゃない猫は。でも、部族のみんなは『魔者』に憧れてるんですよ。だから、私みたいに自分の子供を『魔者』にしたい！って思ってる人はたくさんいるんです。なにしろカツコイイですからね！」

猫の部族は数が少ない。そして、その中の『魔者』はもっと少ない。シーリーのように性格的に向かない者は戦わない代わりに、魔法で国のあちこちに結界を張って国を守っているのだ。

だが、子供を産んで『魔者』を一人でも増やせば、敵の部族を早く追い払えたり、エンブラン国を守ることが楽になる。『魔者』を増やしたい理由には、それも含まれているのだ。

「そうなんだ。でも、みんなあんまり結婚しないって言ってたよね？」
「コリスはふと思いついて言った。」

「そうなんですよ。でも、それには理由があるんです。」

シーリーは困った顔をした。

「私たちはみんな恋愛色が薄いんですよ。たまに、気が合う異性と同居してる人がいますけど、そういう人は大抵相手を恋愛対象と見てないんですよね。」

つまらないといった感じでシーリーはため息をついた。コリスはきよんとした。

よく分からない様子のコリスを見て、グローリアが説明した。

「恋愛色が薄いというのは……そうだな。あまり我われは恋をすることが少ないと言うのか……興味がないというのか……。まあ、簡単に言ってしまうえば、異性と恋仲になりにくいということだ。」

非常に説明しにくいのか、グローリアは尻尾を揺らしながら言った。コリスは目を瞬またいた。

「それじゃあ、みんな恋人同士にならないんですか？」

「いや、なるやつはいるぞ。だが、大抵は恋人まで発展することは少ない……。ただ、シーリーが言ったように気に入った相手と一緒に暮らしている者はいるがな。」

「そうなんですか？僕は……どうなんだろう？恋人ってどんな感じなんだろう」

コリスは、まだ知らない将来の相手を思い浮かべながら言った。

「さあな。だが我われにも結婚というのがあるから、コリスも積極的に相手を探せばいい。」

生暖かい目で見つめられて、コリスはゾクツと身体を震わせた。別にそんな目で見なくても……、とコリスは切実に思った。

すると、シーリーが思いついたように「そうだ！」と突然声を上げた。ビククリしているコリスに詰め寄ると、期待するようにじつと見つめる。大きな銀色の瞳がすぐ目の前に迫ってくる。いきなり

のシーリーの変貌に、コリスはビククリして後ずさった。

「コリス君！もし気になる子が出来たら私に相談して下さいね！なんでも相談を聞きますから！」

むしろ、相談事よりもそういう話が聞きたいという顔をしているシーリーに、コリスはますます後ずさった。

「えっ、僕たちって恋愛にあんまり興味ないんじゃないの？」

「いえいえ、私は自分のことはどうでもいいんですけど、他の人の恋愛事になると凄く気になるんです！だから、コリス君！私に遠慮なく相談して下さいね！」

ニコツと笑うシーリーに、コリスは助けを求めてグローリアを見た。グローリアは呆れたようにシーリーを見やった。

だが、シーリーは楽しみが増えたとずっとニコニコしている。

コリスは冷や汗をかきながら、もし恋愛の悩みが出来ても、絶対にシーリーには言わないと堅く心に誓った。

少なくとも、グローリアは恋愛に全く興味がないようなのに、シーリーは（他人に対して）興味深々だ。コリスは不思議だなあ、と思った。

だが、ふと自分も猫の部族にしては好奇心が強いらしいので、仲間のほとんどが『マイペースで無関心で恋愛色が薄い』というわけ

ではないのかな、とちよつと失礼なことを思った。

恋愛ごと（後書き）

【恋愛】

猫の部族は恋愛色が薄いということでしたが、お分かりいただけたでしょうか？なんというか、そういう感情があまり無いということなのですが、なんとなく分かってもらえるとありがたいです。

そのところ、グローリアも説明し辛そうですね（汗

なにか今回で疑問に思ったり矛盾がありましたら、教えていただけると思います。

では、今回もありがとうございました。

文字の勉強とまとめ

「さつき、シーリーがうちの部族は恋愛色が薄いと言っていたが、子供が生まれにくい理由はもう一つある。」

「え、なんですか？」

コリスはグローリアを見上げた。シーリーは昼食の後片付けをしにキッチンに行っているので今はいない。

「部族全体の出生率が低いことだ。それも他の部族と比べると、圧倒的に少ない。」

コリスはきよとんとした。

「え？しゅっさんりっ？」

「つまり、我われの部族は子供が出来にくいということだ。」

「ええっー。」

コリスは驚いた。恋愛色が薄くて、尚且なおっ子供が出来にくいなんて、踏んだり蹴ったりじゃないか？

「我われの部族では、一生に持つ子供の数は多くても2人だ。だがまあ、仲間のほとんどは子供を持たないで死ぬことが多い。過去に部族の中に3人生んだ者がいたが、1人でも十分子宝に恵まれていると言えるな。」

コリスは、ポカンとした。それを見て、グローリアはふっと笑った。そして、安心させるように言う。

「大丈夫だ、普通の猫からも部族の子供は生まれるからな。むしろ、そういうのがほとんどだ。だから、部族の数が減るということはないぞ。」

部族から生まれた子供は希少だが、特別視されるということはない。だから、そういうことで心配する必要はないからな。」

「はい……。分かりました。」コリスはグローリアを見上げた。

「話は終わりだ。頭の整理が追いつかないだろう。」

実際、コリスは頭の中がぐるぐるしていた。あまりにも沢山たくさんのことを聞いたので、最初の方を忘れてしまっているかもしれない。

コリスはなんとか思い出そうと、頭を振り絞ふった。

「う……んと、『魔者』っていう戦士がいて、尻尾が二又になった『魔者』は弟子を育てて、その弟子は儀式で大人になって……。えっと、えっと……。」

「まあ、落ち着け。そこら辺が分かっているなら大丈夫だ。あとは生きていけば分かってくる。」

そうグローリアは言うと、思っていたよりもコリスの頭の中にしっかりと教えたことが入っていることに、少し微笑んだ。

コリスとグローリアは話を終えると、文字を勉強し始めた。主に覚えるのは、世界共通語と住んでいるエンブラン国で使われている文字だ。

グローリアは最初に、人間の子供が学校で習う国語の教科書を、積み重ねてあつた本から引つ張り出した。

それをコリスの目の前に広げると、絵と一緒に書いてある単語をグローリアが指差しながら読み上げていった。グローリアが示した絵と文字をじつと見ながら、コリスも一緒に読んで頭に入れていった。

一通り読み終えたグローリアは、魔法で絵を真っ黒にして分からなくさせた。

コリスはそれを見て驚いた。グローリアは、ちよつと手で絵に触れただけなのに。魔法つて不思議だ。

「テストをするぞ。これはなんだ?」と言って、真っ黒な絵の下にある文字を指差した。

コリスはうーんとうなつてから、

「『馬』ですか?」と答えた。

「違う。文字を覚えるんじゃないで、雰囲気で覚える。これはなんだ?」

「うーんと……。」

と言いながら、もう少し前に教えてくれたらよかったのにとコリスは心の中でつぶやいた。

だが、事前に教えるとあまり意味が無くなるので、グローリアはあえて教えなかったのだ。気づいてから直すほうが、頭に入りやすいことをグローリアは知っていたからだ。

「じゃあ、また一通り読むぞ。」とグローリアはそう言って、絵に手を置くと何かをふき取るようにさすった。

すると、真っ黒だった絵が元通りになっていたのでコリスは感嘆かんだんした。

「すごいや！これって魔法ですよね？あ、そういえば、魔法はいつ教えてもらえるんですか？」

コリスはキラキラした目でグローリアを見た。自分もこういうことが出来るようになるのだと思うと、わくわくしてきたのだ。グローリアは教科書のページをめくりながら、そ知らぬ顔で言った。

「まだ早い。早くやりたい気持ちは分かるが、今は文字を勉強する時間だ。」

コリスはがっくりして耳を垂れた。

その後、二人は向き合ってまた教科書を読んでいた。コリスは、今度は文字を雰囲気覚えようとなんとか頑張った。

そして、テストの時。コリスは前の時よりも間違いが少なくなっていることに気づいて喜んだ。

「終わったー！」勉強が終わって思わず叫んだコリスは、心地よい達成感たうせいかんに包まれていた。

なにしろ最後には、すべての単語を間違えずに言うことが出来たからだ。コリスはカチコチに固まった身体を弓なりに伸ばした。

窓に近づいて外を見ると、夕日で空が赤くなっていた。グローリアの家の前に植わっている木には花が咲いていて、その白い花びらが夕日に当たって薄っすらと桃色になっていた。

「まだ終わってないぞ。次はエンブラン国の文字だ。さっさと覚えるぞ。」

「ええー！」

こうして、コリスは長く思えた一日を無事に終えた。

文字の勉強とまとめ（後書き）

【あとがき】

ながーい一日がようやく終わって、それと同時に『猫の部族』の説明（？）も書き終わりました。

あまりに長くて、コリスと同じでほとんど忘れている方もいらっしゃるかと思います。

でも、大丈夫！グローリアが言っていたように、あの部分を覚えていれば大丈夫ですから（笑）

その他は、ぼんやりとさえ覚えていて下されば大丈夫です！

誤字脱字や矛盾があれば、気軽に言っして下さい。誤字脱字すぐに直します！矛盾のほうは、頑張って考えます（笑）

それでは、ありがとうございました。

森の猫

その夜、コリスは夢を見ていた。

そこは、美しい森だった。瑞々しい葉っぱを持った木々たちが、コリスの頭上で囁き合うように揺れている。心地よい金色の木漏れ日びが木々の間から降り注ぎ、座っているコリスの水色の毛並みを輝かせていた。

ここはどこだろう…？

とても快い場所だった。そつと茶色い地面を踏みしめると、土が柔らかく受け止めてくれた。こんなに眩しい世界をコリスは知らなかった。

上を見上げると、微かに青空が揺れる葉っぱの間からチラチラと見えた。それぐらい、木々が生い茂っていた。小さなコリスを包み込むような、そんな若草色の世界。

ふと、鼻に甘い花の香りがかすめた。前を向くと、コリスは誘われるようにその香りの源へ歩いていった。

すると森がひらけた場所に、コリスはたどり着いた。そして、そこには森の色をそのまま移したかのような、美しい若草の毛並みを持った猫が座っていた。

コリスは目を覚ました。ぼーっとしながら起き上がったコリスは、ふと隣で寝ていたグローリアがまたいなくなっていることに気がついて、不安が込み上げてくるのが分かった。

とりあえず寝て乱れた毛を舐めて整える。そして、夢のことを思い出していた。

あまりにリアルだったせいで、今でも森の中にいるような心地よさに包まれていた。とても不思議な夢だった。

あの猫は誰だったんだろう？離れていたので、顔がよく見えなかった。メスカオスカも分からない。コリスは少し考えていたが、ただの夢だろうと思って気にしなかった。

「おはようございまーす！」

朝っぱらから元気よくシーリーが挨拶をした。グローリアの部屋にトコトコとやって来た猫のシーリーは、白くて長い尻尾をフリフリと振っている。驚いてひょっこりと寝床から顔を出したコリスは「おはようー。」と声を返した。

「ふふ、よく眠れましたか？」シーリーは笑いながら聞いた。

コリスは、また一瞬だけあの夢のことを思い出したが、何も言わずにコクンとうなずいた。

「うん、疲れてたからよく眠れたよ。」

コリスは、昨日の夜までやっていた勉強のことを思い出して言った。今日もやるのかと思うと、げんなりして耳を垂れた。

それにシーリーは笑うと、微笑んだ。

「最初は大変ですけど、慣れれば身体もついていきますよ。まあ、教えないといけない事が山積やまうみですから、大変なことは仕方ないんですけどね。」

「うん……。ねえシーリー、グローリアがどこ行ったか知らない？」

「グローリアならリビングにいますよ。きっと今頃は、コリス君が起きてくるのを待ってるんじゃないかしら」

それを聞いてコリスは安心した。昨日の朝は家にいなかったから、今日もないのかと思ったのだ。

シーリーはそんなコリスを見て、嬉しそうにニコニコした。

「そういえば、昨日はどうしてグローリアがいなかったの？」

コリスはふと首をかしげて聞いた。

その話の間、シーリーとコリスは歩いてリビングへ向かった。

「コリス君が無事に弟子になったことを、あの人へ報告しに行っただですよ。コリス君も近いうちにその人に会いに行くとおもいますよ。」

「その人って誰？」

「ふふ、会えば分かりますよ。」

シーリーは意味深に微笑むだけだった。コリスはまた首をかしげた。その人って誰なんだろう？グローリアが報告しに行っただけの人なんだから、部族の偉い人なのかな・・・？

なかなか鋭いことを考えているコリスだった。

リビングに行くと、二又の猫が暖炉の前で座っていた。グローリアだ。シーリーとコリスはトコトコと絨毯の上を歩いてグローリアの元へ行くと、グローリアが振り向いた。

そして、シーリーの後ろについているコリスを見て微笑んだ。コリスはちゃんとグローリアの前で座ると、グローリアを見上げて「おはようございます」と言った。

「ああ、おはよう。よく眠れたか？」

畏まった様子のコリスに失笑しながら、グローリアは聞いた。するとコリスは、今朝に見た夢のことをふと思い出して少し答えに詰まってしまった。

グローリアはコリスの異変に気が付くと、シーリーをキッチンに行かせて「どうした？なにかあったか？」とコリスに聞いた。

コリスは暖炉の前で身体が温かくなるのを感じながら、ちょっと俯うつむいた。こんな他愛たあいもない夢の話をしていいのだろうか、コリスは分からなかった。

だが、グローリアは聞いたような顔をしていた。それでコリスは渋々しぶしぶ話し始めた。

「夢を見たんです。僕はキレイな若草色わかぐさいろの森の中にいて、そこに森と同じ色をした猫がいたんです。」

グローリアの瞳の色が変わった。だが、そのことにコリスは気が付かなかった。

「どんな猫だ？」グローリアは優しく先をうながした。

「遠くから見たので顔はハッキリ見えなかったんですけど、でもキレイな猫でした。」

コリスはそう言った。

グローリアは少しの間、黙っていた。そして口を開いた。

「コリス、その猫に見覚えはないか？以前、どこかで見かけたとかは？」

コリスは横に首を振った。見たこともなければ聞いたこともない。そもそも、部族の猫はグローリアとシーリーしか知らないのだ。

そこでコリスは、はっとした。そんな猫など、一度も見たことが

ないのだ。ということは……。

グローリアは聞いた途端、その夢がただの夢ではないと分かっていた。だから目の色を変えたのだ。

一度も見たことがない猫の夢。それは何を示すのか、コリスには分からなかった。そして、グローリアはルビーのような瞳を細めて、いたく深刻しつこくそうな顔をしていた。

何しろ、若草色わかぐさいろの猫など部族にいないのだから。

森の猫（後書き）

【お詫びとお知らせ】

遅くなって申し訳ありません。PCが直ったので、これからも今まで通り週一で更新していこうと思えますので、どうぞよろしくお願いたします。

白い猫

その日の夜、コリスはまた夢を見ていた。それは、昨日と同じ夢だった。

美しい若草色の世界。そこは、コリスを歓迎するかのよう
にキラキラとコリスを包み込んでいた。

コリスは息を飲んだ。それは、夢の続きだった。離れたところに
あの若草色の猫が座っている。

コリスは少し迷ったあと、ゆっくりと近づいて行った。若草色の
猫は、前にある木が気になるのか見上げていて、コリスには気付い
ていない。だが、2mくらい近づいたとき、気がついてこちらを見
た。

コリスはドキツとして、思わず出かかった足を止めた。若草色の
猫は、身体と同じ色の瞳をこっちに向けている。とてもきれいなメ
ス猫だった。

コリスは緊張してそのままの姿で立っていた。若草色の猫も、何
も言わずそのままの姿勢だ。

二匹は見詰め合った。

時間が経って少し余裕が出てきたコリスは、ふと違和感に気付い

て首をかしげた。相手の模様が変わっていたのだ。

明るい薄緑の模様が若草色の身体にツルのようにくねくねと巻きついている。初めて見る猫の模様だった。遠くからは単色に見えたので、コリスは少し驚いていた。

じーっと見つめているコリスに、若草色の猫はやさしく微笑みかけた。コリスははっとして、慌てて笑い返した。

不思議な時間だった。

温かく柔らかな風が、二匹の毛並みをそっと撫でていった。

目が覚めたコリスは、はっとして起き上がると、すぐさまリビングへ駆けて行った。寝癖そっちのけでリビングに着くと、グローリアが昨日と同じように暖炉の前で座っていた。

実は、昨日グローリアに「また同じ夢を見るならば言うように」と言われていたのだ。

気配に気付いたグローリアは振り返ると、駆けてくるコリスを見て、そっとため息をついた。

「また夢を見たんですか？」シーリーはきよとんとした顔で言った。シーリーには昨日、グローリアが話しをしたので夢について知っているのだ。

コリスは朝食を食べながらコクンと頷いた。心なしか、小さな耳が垂れている。グローリアは人間の姿でシリアルを食べながら、何か考えているような顔をしていた。

コリスはそれを見つめた。

コリスがこの家で3日間過すごして分かったことだが、グローリアとシーリーはご飯を食べるときは必ず人間の姿になって食べていた。食べている料理も、スパゲッティやオムライスのように人が食べるものばかりだ。まあ、姿が人間なのだから人が食べるものを食べても別におかしくは無いのだが。

ついでに言うと、今コリスが食べているのも人間の料理に近かったりする。だが、その代わり味は薄いので人間の食べ物とはいまいち言えない。

「よし、街に行くか。」グローリアが突然そう言った。

「えっ!?」それを聞いて、コリスとシーリーが声を上げた。シーリーは何故かちよっと興奮している。

「じゃあ、あの人に会いに行くんですか？」シーリーがグローリアに聞いた。

「ああ、そうしようと思う。コリスの夢のことは私でも分からないからな。聞けばなにか分かるかもしれない。」

あの人？あの人って誰だろう？コリスは声を上げた。

「あの人って誰なんですか？」

「私の師匠だった猫だ。」グローリアがルビーのように赤い瞳をコリスに向けて言った。

「！！？」コリスはビクビクしすぎて声が出なかった。

グローリアの師匠！？一体、どういう猫なんだろう？コリスは興奮。

「コリス君、グローリアの師匠は部族の中で一番長生きしてる人なんですよ。だから、礼儀正しくね。」

と、シーリーが言った。

「えっ……って、僕も行の？ど、どうしよう……。」「コリスは礼儀正しくと言われ、どうしていいのかわからなかった。」

「別に普通でいい。それに、別にあいつに気を使わなくても構わん。」

「え」

コリスとシーリーは苦い顔をしているグローリアを見た。

・・*・*・*・*

「よろしく伝えといて下さいね。」シーリーが玄関で二人を送り出しながら言った。

人間のグローリアは、コリスが初めて会った（連れ去られた）ときに着ていた黒いコートを羽織っている。コリスは何も着けずにそのまんまだ。

ふと、コリスはシーリーを見上げた。

「シーリーはグローリアの師匠に会ったことがあるの？」

「ええ、ありますよ。すごくキレイな白猫です。同じ白猫ですから、会うときはいつも良くしてもらってるんですよ。」

と、シーリーは嬉しそうに言った。だが、今回はシーリーは家の家事があるので一緒に行けない。留守番として残るのだ。

グローリアの師匠って白猫なんだ……。コリスはちょっと想像した。

「じゃあ行ってくる。家のことはまかせたぞ」

一体、どんな猫なんだろう？コリスは偉い猫（人）に会うことに少し緊張しながらも、結構わくわくしていたのだった。

白い酒

グローリアは、家の前にある庭の中心へ歩いていった。芝生を踏みしめながら庭の中央に立つと、グローリアは不意に、空に向かって手を上げた。コリスとシーリーは家の玄関でそれを静かに見ている。

コリスはどうしたんだらうと不思議そうに見上げた。

すると、グローリアの手の先から空間が歪んでいくのが見えた。

「うわぁ……。」コリスは驚いてそれを見つめた。

シーリーはそのようすをコリスと一緒にじっと見ていた。すると、グローリアが手を上げながらシーリーに言った。

「シーリー、お前も結界を解け。」

「はい。分かりました。」シーリーは返事をする、宙に向かって指をクルクルと回した。すると、シーリーの指からも、波紋のように空間が歪んでいくのが分かった。

二人は結界を解いているのだ。コリスは不思議そうに、二人を交互に見つめていた。

「んじゃ、行くか。コリス、こっちに来い。」結界を解いたのか、グローリアはしゃがみ込むとコリスに向かって手招きした。

「気をつけて下さいね。あ、お土産^{みやげ}楽しみにしてますから。」
「シーリーはにっこりした。」

それを聞いて苦笑^{くしやう}しているグローリアの元へ行くと、コリスは抱っこされた。一気に視線が高くなる。

「うわあ。」コリスは落ちないように、慌ててグローリアの腕を掴んだ。いきなりだったので、少し爪を立ててしまったかもしれない。コリスは冷や汗を流した。

「行ってくる。シーリー、留守番を頼んだぞ。」

「行ってくるね、シーリー。」

「はい、行ってらっしゃいませ。」シーリーはにっこり笑いながら玄関から手を振った。

グローリアは魔法を使ってふわりと宙に浮くと、空に飛び上がった。コリスは突然の浮遊感に襲われて「わっ！」と身を縮ませた。

「なんだか、あの時を思い出すなあ……。コリスはおもわずそう思った。」

連れ去られたときはパニックで、周りを見ている余裕がなかった。コリスは過ぎていく森の景色を見ていた。二人は森の上をしばらく飛んだ。すると、前方にレンガで出来た家々が見えてきた。

「街だ。コリスは興奮しておもわず身を乗り出した。」「うわあ。」

耳とヒゲを風でなびかせながら、コリスは初めて見る街を見つめていた。

「どんなところなんだろう。部族の仲間にも会えるかな・・・？コリスはわくわくした。」

「ねえ、グローリア。あそこに行ったら仲間に出会えるのかな？」コリスはグローリアの顔を見上げて言った。

グローリアは短い黒髪を風に遊ばせながら「会えるぞ。」と言った。それを聞いて、ますますコリスは街への期待が膨らんでいくのだった。

・・*・*・*

街中に降り立ったグローリアとコリスは、そのまま街を歩いていた。コリスは相変わらずグローリアのに抱っこされて、せわしなく目をキョロキョロさせていた。

「・・・グローリア、どうして僕を降ろしてくれないんですか？」

一業 ころを煮やしたコリスは、とうとうグローリアに聞いた。

すると、グローリアはそ知らぬ顔で「危ないからな。」と言った。

この魔法の世界で、まだなにも魔法を覚えていないコリスを一人で歩かせることが心配なのだ。それに、好奇心の強いコリスはきつとフラフラとどこかへ行つて自分から離れてしまつに違いないとグローリアは思っていた。

そんなことは露知らず、いくら言つても聞いてくれないグローリアに腹を立てながら、コリスは狭いせまコートの間から見える美しいレンガの町並みを仕方なく見ていた。

そんな街の人々は、グローリアを珍しいものでも見るようにジロジロと見ていた。コリスはそれに気がついた。グローリアの顔を見上げると、気付いているはずなのに全く気にかけていないようすだった。

どうしてこんなにもみんな見るんだろう？コリスは分からなくて首をかしげた。

すると、ただ黙々と歩いていたグローリアがある古びた店に入つた。

その店は昼間なのに薄暗くて、大きな棚が壁一面に並べられている小さな店だった。その棚には、大量のビンが置かれていた。嗅いだこともない、不思議な匂いが店中にただよっていて、コリスの鼻をひくつかせた。

その店の店主が、客の気配を感じてかカウンターから顔を出すと、

グローリアを見て驚いていた。年老いた、どこか気品を感じさせる男だった。

「おやおや、これは……。お久しぶりですね、グローリアさん。」と、店主は嬉しそうに優しい目元にシワをよせた。

どうやらグローリアの知り合いらしい。グローリアも「ああ。久しぶりだな。」と親しげに返していた。グローリアはどこか、懐かしげに店の中を見渡している。もしかして、ずっとこの店に来ていなかったのだろうか？ コリスは鼻をひくつかせながらそう思った。

「ここへは、どんな御用ごちゆうで？」

「白い酒が欲しい。まだ造っているか？」グローリアが少し心配そうに聞いた。

「はい、まだ取って置いてありますよ。最近はなかなかこの酒を造れなくなりましてね……。置いてある分しかないんですけど、それでもいいですか？」

店主は少し申し訳なさそうに言った。

「構わない、それをくれ。」グローリアは酒があったことに安心したのか、全く気にしていない様子で頷いた。

それを見た店主は微笑むと、酒を取りに店の奥へと消えた。

コリスはなんだか、店にただよう匂いのせいで頭がぼーとしてくるのを感じていた。コリスが嗅いでいるのは酒の香りだ。コリスは

匂いを嗅いただけで半分、酔っているような状態だった。

「おい、大丈夫か。どんだけ酒に弱いんだ……。」「グローリアはくらくらしているコリスを見て、少し呆れたように言った。

仕方がないので、グローリアは魔法でコリスの周りだけ空気を変えてやった。

しばらくして戻ってきた店主は、酒の入ったビンを丁寧に袋へ入れるとグローリアに手渡した。

「白い酒……。ということは、『墓の番人』に会いに行くんですね。」「店主はそう尋ねた。

「ああ。ちょっと私の弟子が夢を見てな。そのことを聞きに師匠に会いに行こうと思っている。」「

グローリアは黒いコートのポケットに手を入れながら言った。コートのポケットにはこの国のお金が入っている。お金を取り出すと、店主にそれを渡した。

「そうですね……。お弟子さんが出来たというのは本当だったんですね。噂で聞きましたよ。」「

店主はもらったお金を手で数えながら、意味深にグローリアを見た。コリスはドキツとした。自分が噂になっていたのだ。

「そうか。それじゃあ、私は行く。またいつか来るよ。」「グローリアは大して気にもとめずにそう言うと、その場を去ろうとした。

「ええ、きつと私が生きているうちにまた来てくださいな。楽しみにしていますよ。ご来店ありがとうございます。」

年老いた店主は少し寂しそうに言うと、丁寧に頭を下げた。

グローリアは無表情だった。いや、少しだけそのルビーの瞳に悲しみが混じるのをコリスは見ていた。

グローリアは酒を片手にコリスとその店を後にした。

白酒（後書き）

少し長かったですね・・・（汗）

感覚でいつも書いているので、たまに長くなったり短くなったりしますが、最近是一个の章を長くしようと思って頑張ってます。

・・・けど、これはさすがに長かったですね（笑）

魔法の魚

「あれ、もしかしてグローリア殿じゃないですか？」

グローリアとコリスは、店から少し出たところで声をかけられた。グローリアが振り返ると、そこには赤い髪をした、勇敢そうな男が立っていた。20代くらいの若い男だ。コリスは興味津々で、コートの中から覗いた。

「ああ、レオバルか。久しぶりだな。レアイアは元気か？仲良くやってるか。」

グローリアは穏やかな顔で聞いた。

「ええ、元気ですよ。仲は相変わらずですが……。ところで、どうしたんですか？めったに街に来ないあなたが……。」

レオバルと呼ばれた男は不思議そうに聞いた。コリスはコートの間から男の髪の毛を見た。よく見ると赤一色ではなく、他にもわずかに色が混じっている。伸ばしているのか、耳より少し長いくらいだ。

「まあな。実はちょっとした事情があったな。師匠に会いに行くこと思っているんだ。」

レオバルは驚いた。そして、グローリアが手に持っている白い紙袋を見ると納得したように微笑んだ。

「そうだったんですか。では、これから『あの山』に行くんですね？」

コリスは首をかしげた。あの山　　？

「いや、『魔者の街』に寄っていきこうと思ってる。せっかく街に着たしな。」

そう、コリスとグローリアは一旦『魔者の街』に寄ってからグローリアの師匠のところへ行く予定だった。コリスは、このあいだ聞いた『魔者の街』にどうしても行ってみたかったのだ。

レオバールは嬉しそうに言った。

「そうですね、みんなも喜びますよ。でも、残念です。用事がなければ御一緒するのですが……。」

「ああ、別に気にするな。レアイアにはよろしく言っておいてくれ。あっちで会うかもしれないが……。」

「もちろんですよ。きっと、彼女も喜びます。」

レオバールは本当に嬉しそうに言った。その後、レオバールと別れた。だが、別れる間際に、コリスは彼からウィンクされてビックリした。レオバールはグローリアのコートにいる子猫の存在に気付いていたのだ。

コリスはふと、去っていくレオバールの足の間から、一本の赤い尻尾が揺れているのに気がついた。コリスはあっと声を上げた。あの若い男は同じ部族の仲間だったのだ。

「・・・ねえグローリア、さっきの人って同じ部族の人ですよね？」
コリスはそう聞いた。

「ん？ああ、レオバールのことか、まあな。」

「あの人、僕に気付いてたよ。」コリスは不思議そうに聞いた。

「あいつは『魔者』でもあるからな・・・。だから、お前に気が付いたんだろう。」

グローリアはさらりとそう言った。

そうだったんだ・・・。コリスは妙に納得していた。

戦士だったら、コリスの気配に気付いていてもおかしくない。コリスは『魔者』を尊敬するようにレオバールの姿を見た。

「・・・ところで、レイアさんって誰なんですか？」コリスは気になっていたことを聞いた。

「レオバールの恋人だ。・・・まあ、仲がいいとは言えないが。」

「えっ！あの人って恋人がいるんですか？」コリスは驚いた。

猫の部族で恋人がいるのは珍しい。コリスは聞きたそうにグローリアを見上げた。グローリアはそれを見て困ったような顔をした。

「そういつことはシーリーに聞け。私は、詳しくは知らないからな。」
「でも、レアイアさんのことは知ってるんですよ？一体、どんな人なんですか？」

コリスは好奇心こつきしんまんまん満々で聞いた。グローリアは指をあごにやって、少し考えるそぶりをした後、言った。

「そうだな……。気が強……。いや、なんでもない。」グローリアはそこで言葉を切った。

「え？」コリスはきよとんとした。

「まあ、会えば分かる。」と、グローリアはそう言いくるめて、黙々と歩き出した。

・・*・*・*・*

「ここが『魔者の街』だ。」

グローリアは立ち止まるとコリスに言った。コリスは黒いコートの間から顔を出して、キラキラした目で周りを見渡した。

レンガ造りの家々が立ち並ぶ場所の真ん中に、大きな石造りの広

場があり、そこにグローリアは立っていた。目の前には白く美しい噴水が水を噴き上げていて、コリスは初めて見る噴水に興奮して、グローリアの腕から身を乗り出した。

すると、グローリアが噴水へと歩いて行き、コリスを噴水の前に降ろしてくれた。コリスは降ろされたことに戸惑ったが、コリスは嬉しそうにタツと噴水の縁に飛び乗ると水の中を覗き込んだ。

水の中には細い小さな色とりどりの魚が、ユラユラと優雅に泳いでいるのが見えた。

「わっ！魚だー！」コリスは嬉しそうに耳をピンと立たせた。ふと、コリスはグローリアを振り返って尻尾をパタパタさせると「グローリア僕、魚を捕まえるのが得意だったんですよ。」と言った。

「え」グローリアは目を点にさせた。

コリスが身体を構えて噴水の魚を捕らえようとしているのだ。コリスは、ユラユラ揺れる水面に自分の影を映しながら、寄って来た赤色の魚に狙いをつけてさつと右足を繰り出した。だが、手に当たるはずの魚の感触がなかった。

「えっ!?!」

そのことにビックリしたコリスは、思わず頭から噴水の中にバツチャーン！と落ちてしまった。

グローリアは呆れたように顔に手を当てて「それは魔法だ・・・。

「と言いつとコロリスを助けに噴水へと歩いていった。」

金のトラ猫

「待て！バカ猫！！」突然、こっちに向かって叫び声がした。

コリスはひよっこりと水から顔を出して見ると、広場へと走ってくる二つの影があった。グローリアもそちらの方を見る。

ダツとものすごいスピードで走ってきたのは、こげ茶色の毛に金色の模様をした一匹のトラ猫。

「誰が捕まるかよっ！バーカ！」と嘲りながら、噴水をあつという間に横切っていった。

それを慌てて追いかける人間の男。かなり走ったのか、息が苦しそうだつた。

「はあはあ、全く！あいつめ……。」「追っていた人間の男が息を切らしながら罵倒した。

コリスは何事かと首をかしげて見ていたが、新たな人間がゆっくりと広場まで歩いてくるのを見てそっちに気をとられた。

その人間は、はっとするような美しい銀色の長い髪をなびかせた若い男だつた。コリスは、その銀髪の男が着ているコートから二つの尻尾が伸びているのを見て、パツと噴水の縁に飛び上がった。

二又の尻尾だ。

つまり、同じ猫の部族であり、グローリアと同じ『魔者』であり、

50年以上も生きている猫なのだ。

ちなみに二又の猫は、部族の子供（子猫）を弟子にして立派な部族の大人に育て上げるといふ使命も与えられている。

銀髪の男は、息を切らしている男に話しかけた。話しかけられた男は少し驚いたあと、銀髪の男に何か言っているようだった。少しすると、銀髪の男が申し訳無さそうに頭を下げた。グローリアはそれを黙って見ていた。

「どうしてあの人は謝ってるんですか？あのトラ猫が謝ることなのに。」トラ猫が何をしたか分からないが、コリスは思わずそう言った。

グローリアはコリスを静かに見ると、また視線を銀髪の男に戻した。

「あの男は、トラ猫の師匠だからだ。」

「えっ？じゃあ、あの猫ってまだ子供だったの？！」コリスは仰天きょうてんした。

さっき見かけたトラ猫は、少なくともコリスよりずいぶん大きかった。コリスはトラ猫が走り去っていった方を見ながら、初めて会った同じ部族の子猫にドキドキしていた。

視線を戻すと、トラ猫を追っていた男が来た道に戻っていた。銀髪の男は肩を落とした様子で、しばらく去っていく男を見つめていた。

「あの銀髪の男の名前はエリ阿斯。最近、初めて弟子を持ったと聞いたが、どうやら上手くいってないようだな。」

グローリアはどこか、懐かしいものでも見るような目をして見ていた。コリスは身体からポタポタと滴る水を気にしながら、項垂れた様子うなだのエリ阿斯を見つめた。確かに、あの猫を手なずけるのは背中を搔かくより難しそうだ。

「いくぞ。」グローリアはそう言うと、コリスを抱き上げて静かにその場を立ち去った。

コリスは濡れている身体で身を乗り出すと、グローリアを不思議そうに見上げた。

「何も言わないんですか？ 挨拶とか……。」

あの状況で気軽に挨拶あいさつは出来ないだろうなと思いつつ、コリスは落ち込んだ様子ようすのエリ阿斯が気になっていた。

「……今、あいつはあいつで精一杯やってるんだ。だから私から言うことは何も無い。」

と、グローリアは少し厳しく言った。コリスは耳をたらし、じっとエリアスの後姿を見ていた。

「そういえば、さっきの噴水ってなんだったんだろう？」 広場からしばらく歩いたところでコリスは、ふと思い出した。

「ああ、あれはな。あの噴水には魔法がかかってるんだ。噴水の水を覗くと、その者の思い描いている物が映る。お前の場合は魚だったな。お前は魚がいると思ったから、そう見えただろう。」

「へー！すごいですねえ。てことは、僕が違うものを思い浮かべたら、魚とは別のものが見えたんですか？」

コリスは面白そうに言った。今度行ったら試してみよう。コリスはまた行きたくそうに身体をウズウズさせた。グローリアは呆れたように息を吐いた。

「また落ちるぞ。」

「もう落ちませんよ。それに、僕はけっこう水の中が好きなんです。」

「コリスは的^{まとははず}外れなことを言うと、胸を張った。

結局、広場には戻らなかった。グローリアがそう言って一譲ゆずらなかつたのだ。というのも、コリスのわがままで『魔者の街』に寄りたりしていたので、予定よりも時間が経っていたからだった。

二人は飛ぶために街の外れにいた。

「また飛ぶぞ。今度は距離があるから少し速めに飛ぶが・・・結果でも張っておくか。」

グローリアは白酒の入った紙袋を地面に置くと、手を身体に沿うように振った。すると、グローリアの身体の周りに薄い膜のようなものが出来き、コリスはそれをキラキラした目で見た。

「あれ？なんで結界を張ったんですか？」

「息が出来ないだろう。」

二人は静かに空へ飛び立った。

メリシャスは眠る

フサフサとした毛の長い白猫が、鋭い黒色の瞳をコリスに向けて座っていた。グローリアの師匠がいる山へとやってきたコリスたちは、いま、『彼』の家である小さな小屋の中にいた。

「……で？この子猫のなにを聞きにきた？」長毛の白猫は気だるげなようすでコリスからグローリアへ目を向けた。その黒い瞳は、年老いた今でも力強い光を放っている。

「夢を見るんだ。」グローリアは黒猫の姿になっていた。

「夢？」元弟子の、あまりにも説明不足な物言いにいら立ったようすで、年老いた猫は聞き返した。

「ああ、夢だ。なぜか若草色の毛をした猫の夢を見るんだ。それも、3日続けて。」

グローリアはそんな元師匠のようすに構わず、たんたん淡々と言った。

グローリアの師匠であるフォークスは、またコリスへと目を向けると、コリスはビクツと体を震わせた。グローリアの師匠に、コリスはすっかり気圧けおされていた。

「……名前は？」

「コリスです……。」コリスは隣に座っているグローリアを不安げに見上げた。グローリアと目が合った。グローリアのルビーのような赤い瞳に、おだ穏やかな色がただよっているのを見たコリスは、体

から力を抜いた。

「どんな夢を見る？ コリスとやらよ。」

コリスはのんびりと横になっていいる年老いた白猫に、詳しい夢の話をした。フォークスはその間、静かにコリスの話を聞いていた。時々、その二又の尻尾を揺らしながら。コリスは二又の尻尾が揺れるたんびに、おかしなことを言っていないか思い返していた。

「・・・ほう。なかなか面白い夢じゃな。」 コリスが話を終えたとき、フォークスはそう言った。

だが、まったく面白そうな顔をしていない。だが、年老いた猫はその気だるげな目でコリスをじっと見つめていた。

「フォークス、なにか分かるか？」 グローリアは静かに聞いた。

年寄りの猫はチラリとグローリアを見ると、目をゆっくりと閉じてふうーと息を吐いた。

「さあな、どうしてお前の弟子が、その夢を見るのかはワシにも分からん。分かることと言えば、それは死んだものの夢ということだ。」

コリスはギクリと体を硬直カタ直させた。死んだものの夢？ あまりにも不吉なその言葉に、コリスは恐怖を感じた。なんで僕がその夢を・・・？

「どついうことだ？」グローリアはコリスを横目で見ながら、フォークスに鋭く尋ねた。

フォークスは夢のことについてはまったく動じていないようすで前足を舐めたあと、コリスをすつと見据えた。コリスは不安げな顔でビクツと身体を震わせた。

「そこへ行ってみれば分かる。」と、フォークスはアゴで東のほうを指した。

コリスとグローリアは外へ出ると、フォークスの後を付いて行った。グローリアの後ろで歩きながら、コリスは不安で出来た黒い渦が胸の中でぐるぐるとまわっていた。だが、次に目に飛び込んできた光景にコリスはあんぐりと口を開けた。

フォークスがやってきたところは、東側にある山の傾斜面だった。そこだけ全て木が切られ、青々とした草が生い茂っている。その場所には数え切れないほどの墓標が立っていた。

コリスたちがやってきた街のほうから見えない場所にあったので、ここに来るまでこんな場所があるとは知らなかった。

「ここは・・・？」コリスはやっとのことで口を動かすとグローリアに尋ねた。

グローリアはさわさわとした柔らかい風にヒゲと毛並みを揺らせながら、墓標たちを見やった。「猫の部族・・・私たちの仲間の眠

る場所だ。」

「……いわゆる墓地^{ほち}じゃ。ワシはこの場所を守っている墓の番人のようなものだ。」

「墓の番人……。」コリスはフォークスを見上げた。

フォークスは、日に当たってキラキラと輝いている毛並みを風になびかせながら、じつとその黒い瞳で果てしなく続く墓地を見ていた。どうしてここに連れてきたのか、何故フォークスはこの人里離れた山奥に住んでいるのか、コリスには分かったような気がした。

「ワシは荒れ果てていた墓地を整え、きれいにした。そして、街から流れてくる敵から、この神聖な場所を守っている……。」

フォークスはなぜか突然、コリスにそう語った。コリスは、フォークスの瞳をじつと見ていた。一瞬、その力強い瞳に寂しい色が浮かんだように見えた。

と、ふとなにかを感じてコリスは墓地を振り返った。下のほうに続く墓地のほうから嗅いだことのある香りが、漂ってきた気がしたからだ。さつとそこへ向かう。突然、墓地へ走っていったコリスに二人は驚いたが、何かを見つけたのであろうと思い、二人はコリスを追った。

夢で嗅いだ匂^{にお}いが、コリスを導いていた。あの夢のときと同じように。コリスは、その場所へ無意識に足を動かしていた。

そして、目的の場所へとたどり着いた。

コリスの目の前には、緑の蔓つるが冠かんむりのように垂れ下がっている墓標があった。コリスはその墓標を見上げていた。

そこには『メリシャスは眠る』と文字で書かれていた。

メリシヤスは眠る（後書き）

【あとがき】

こんにちは！お久しぶりです。

今回、初めてグローリアの師匠が出てきました。彼は長い毛並みの白猫であり、とても年をとっている猫でもあります。

グローリアの年齢が軽く考えても100を越えているので、そんなグローリアの師匠ですから、一体どれくらい生きていますか……。

作者の私でも分かりません。

そんなことは置いといて、どうして彼の名前をここまで引き伸ばしにしたのかというと、どうしても彼を印象付けたかったからです。

はい、わがままだったのは分かっています。それに、見苦しいくらい無理やりな伸ばし方に、呆れた方はすいません。本当に。

これからもよろしくお願いします。ではまた！

猫は人に憧れる

「メリシヤスは眠る。」

後ろから低い声がして、コリスは振り返った。そこにはフォークスがいた。その後ろにはグローリアもいたのだが、彼はなぜか悲しそうに目をして墓標を見つめていた。コリスはフォークスが、彼女（メリシヤス）のことについて何か知っていると思っ
て聞いてみた。

すると、フォークスは無言で静かに首を振った。

「知らんな。彼女は私よりも古い猫じゃ。会ったこともない。」

フォークスは、だがまだどこか悲しげな色を黒い瞳に宿とどまっていた。コリスは、彼が絶対なにかを知っていると思った。それに、なぜか隠しているような物言いだっ
た。だから聞いてみた。

「何を隠しているんですか？」

そのコリスの余りにぶしつけな態度に、鼻にシワを寄せたフォークスはコリスを見た。だが、コリスの真っ直ぐな水色の瞳に出会うと、フォークスは咎とがめるのをやめた。

グローリアは静かに、じっと事の成り行きを見守っていた。

「……………」

フォークスは自分の後ろにいるグローリアを軽く振り返った。

少し離れたところに座っていたグローリアは、フォークスがその瞳

が言わんとしていることをくみ取ると、そつとその場から立ち去った。

「・・・あれ？グローリア」

「いい、行かせておけ。」フォークスはコリスの言葉をさえぎった。コリスは分からずにフォークスと、グローリアのうしろ姿を交互に見た。

フォークスはコリスと二人つきりになりたかったのだ。今からする話は、余り多くの者に聞かせたい話しではなかった。

「どうしたんですか・・・？」コリスは少し不安になって、フォークスを仰ぎ見た。

フォークスは体制を崩すと、静かに青々とした芝生に横たわった。そして、フォークスは近くにある木を見上げた。メリシヤスの墓標のすぐ近くに木があるので、その木がコリスたちを強い日の光から少しさえぎっていた。木の葉から通した金色の木漏れ日が、フォークスの白い毛並みに点々と降り注いでいた。

「・・・コリス、お前は他の者たちよりも好奇心が強いと聞いた。」フォークスが静かに聞いた。

コリスは何かその場の空気に気圧されながら、頷いた。フォークスはコリスを見てから、メリシヤスの墓標を見つめた。その瞳はどこか虚ろだった。「彼女は太古の時代に生きた猫じゃった。」

「え？」コリスは聞き返した。

「まだ部族が生まれて間もない頃のことじゃ。その時、ワシたちは周りにいる他の部族と違っていた。それは、人の形をしていないことじゃった。」

コリスは言葉を無くした。フォークスはまた悲しげな目をして、墓標のどこかを見つめていた。

「ワシら、猫の部族や他の部族たちは、人に憧れた動物から“人に似せて作られた”のだと神話で言われておる。

だが、猫の部族は人に成り切れていなかった。たとえ人の言葉を話せても、人間のように手を自由に使うことも、愛しい人を抱きしめることも、出来なかった。」

「……………」

コリスは大昔にいた彼らを思った。一体どんな気持ちで人間を見つめていたのだろう、と。

「…………だが、我われには魔力があった。この魔力を使う方法を、彼らは見つけたのじゃ。そして、その力を使って人間になることにも……………」

しばし間があった。

「ワシらは生まれたときは猫の姿で生まれてくる。だが、成長すれば儀式をして人になることが出来る。だが、それは神が私たちに与えた物ではない。ワシらが勝手に作ったものじゃ。」

猫は人間に憧れる。

だが、それらが正しいかは、分からない。」

フォークスは空を見つめていた。

少ししてからフォークスはコリスをそっと見た。

「メリシヤスはお前に何か伝えたいのじゃろう。だがそれを、お前が理解するかは分からない。コリス、お前は　　いや、止めておく。」

フォークスは何かを言いかけて言葉を切った。彼は最後に、かすかに微笑んだ。それは、コリスが初めて見たフォークスの笑顔だった。

「さあ、帰るか。グローリアも気にしているだろうしな。」フォークスはさっと立ち上がると後ろを見た。一瞬、フォークスが少年のような意地悪そうな顔をした気がした。

コリスも後ろを振り返ると、遠くからグローリアがこっちに歩いてくるのが見えた。「グローリア！」

コリスは駆け寄ろうとした。だが、ふと足を止めてフォークスを見ると「あの、さっきの話。グローリアにしてもいいですか？」と

聞いた。

フォークスはどこか遠くを見た。そして、それが彼が考えるときにする癖だと気がついた。

「・・・ああ、いいじゃろう。だが、たまにここへ来て夢の話の話を聞かせてくれないか。」

しばらく考えてフォークスはそう言った。どこか、優しい目でコリスを見ていた。

「はい！・・・そしたら、僕がまたここへ来たときにまた話を聞かせてくれますか？」コリスはキラキラした目で言った。

フォークスは驚いたように目を見開くと、グローリアに言われた言葉を思い出してふっと笑った。「そういえば、お前は好奇心旺盛だったな。・・・ありがとう。」

コリスは微笑んだ。

コリスはグローリアと共にフォークスの元を去った。フォークスの居る山が離れると、コリスはいつの間にかフォークスが好きになっっていることに気がついた。

最初はあるなに怖かったのに、なぜだろう？とコリスは首をかしげた。だが、それはフォークスという人物がコリスが思っていた以上に優しく、悲しい目をしていることに気がついたからだった。

猫は人に憧れる（後書き）

【おわび】

こんにちは！実は、フォークスの口調が「くじゃ」なのに「くだ」と書いていて直す前に更新してました・・・。
すいません！

いや、書いていて気付いていたんですが「ん？」と違和感を感じつつも、載せたあとで「なにか直さないといけないところがあるような気がする」と思っただけで考えませんでした。

ようやく間違いに気付いたのはベッドの中でした（汗）

直しましたので、ご了承ください。

西の訪問者

「知らんな。」

それは墓地からの帰り道だった。うつそうと茂る森の上を飛びながら、グローリアはハッキリとそう言った。コリスはビックリした目でグローリアを見た。

「本当に知らないんですか？」コリスは念を押して聞いた。

「ああ、知らんな。そんな話をしていたのか。」別の方向を見ながらグローリアは言った。

「……………」コリスは怪訝な目でグローリアを見つめた。

コリスは、グローリアにフォークスから聞いた古代の話をしていった。すると、だんだんグローリアがコリスの話に集中しなくなったのだ。どこかうわの空で、コリスを見ようともしない。コリスはグローリアがこの話を知っていたんじゃないかと疑っていた。だからつまらない顔をしているんだと思っていたのだ。

こんなに面白い話なのに……。コリスは話に集中してくれないグローリアに、ガツカリしてふいっと顔を背けてしまった。少し耳が垂れている。

だが、グローリアはどこかをじっと見つめたまま、意味深にその部分を見つめていた。それに気付いたコリスは、グローリアが見て

いるところを見てみた。

青い空とたくさん山々がずっと広がっている。おかしなところは全くない、が。コリスはぐいっと身を乗り出した。三角の耳は伏せたまま、身体の毛が少し逆立っていた。目を凝視している。なにも変わったところのない場所に、本能的に異変を感じたのだ。

なんだろう……。この感覚……。全身がピクピクして、後ろに飛び上がりそうだった。まるで、この場から早く逃げ出せというように。コリスは無意識に、グローリアの腕に爪をぎゅっと立てていた。だが、グローリアは咎めずに静かにじっとその場所を見ていた。

グローリアはコリスとは正反対に、全く落ち着いていた。だが、いつの間にか移動を止めて宙に浮いて立ち止まっていた。

「……行くぞ、コリス。」それに気付いた、グローリアはそう言うのと進もうとした。だが「あっ！」と、突然コリスが叫んだので、グローリアはまた立ち止まってしまった。

ますます身を乗り出したコリスは青い瞳を恐怖に見開いて、ブルブルと震えていた。

「……来たか。」グローリアは覚悟していた声でそう言った。目は、またさっきの場所を見ている。

二人が見ている山々の間に、一つの点が現れていた。それは、その場から全く動かずに少しずつ大きくなっていった。そう、こちら

に向かって来ているのだ。

そして、その点を囲むように、次々と新たな点が空を埋め尽くしていく。見たこともない光景だった。

「・・・なんですか？あれ。」コリスはグローリアに身体を密着させて聞いた。悪寒が絶えずコリスを襲っている。

「敵だ。その方角からすると、犬のやつらだろう。」

犬のやつらというのは、犬の部族のことだ。犬の部族が襲ってきたのだ。コリスは不安げにグローリアを見上げた。だが、グローリアはさつきから緊張したようすもなく、全くいつも通りだった。逆に、リラックスしているように見える。そのせいか、コリスもそれほど取り乱していなかった。

だが、それもそれが目の前に来るまでだった。

あの、一番最初に見えていた点が、ハッキリとした形でコリスたちに向かっていているのが分かったからだ。他の点たちは町のほうへ向かっていくのに、その点だけはグローリアとコリスの元へ猛スピードで飛んできているのだ。

グローリアはその場を動かこうとせず、じっとそれを見つめていた。しばらくコリスを腕に抱いていたが、その点が一人の人間の姿に分かるほど接近してきたとき、グローリアはコリスを片手に乗せて、そっとコートの後ろへと移動させた。

「えっ、えっ？」コリスは目の前が真っ暗で見えなくなり、コリスは気になって身体を前へと伸ばした。

だが、それを感じ取ったのか、グローリアはコリスの回りに分厚い結界を張ると手を離れた。

「?!?!」コリスは浮遊感にビククリして声のない叫びをあげた。グローリアの手から離れたコリスはコートの下から出ると、ふわふわと浮いて降下していった。

そして、上を見上げて縮み上がった。

「グローリア!!!」コリスは必死に叫んだ。いつの間にか、グローリアの目の前には見知らぬ青年が宙に浮いて佇んでいたので。燃え上がるような赤い髪を逆立て、鬼のように恐ろしい瞳の青年がそこにいた。

逆立った長い髪に隠れるように、赤レンガ色の犬の耳が見えた。コリスはぞっとした。あまりにもその青年が放つオーラが凶暴すぎて、グローリアに危害が及ぶのではと心配になったのだ。

「グローリア!!!グローリア!!!」コリスは続けて叫んだ。

だが、結界で声が遮断されているらしく、しかも外からの音も聞こえなかった。ついでに、コリスの姿も外から見えなくしているようだった。現に、おそろしい姿の青年は、コリスに気付くようすもなくグローリアを好戦的な目で見つめていた。

グローリアはコリスを敵から隠すためにそつと魔法をかけたのだ。そして、グローリアはコリスを包んだ結界をその魔法であるところへと向かわせようとしていた。それを示すかのようにコリスの結界が、ゆっくりと前へ進みながら下がっていつていた。

コリスがワーギヤー騒いでいるとき、若い犬の部族の男がニヤリと不気味な笑みを湛^{たた}えた。

舌なめずりをして、赤毛の青年は怪しい瞳でグローリアをじろじろと見つめていた。まるで、食い物を見るような目だった。

青年はつぶやいた。どこか、感銘^{かんめい}を受けた口調だった。「こりやたまげた。かの有名なボス猫が、こんな良い女だったとはな……」

「……………」
「グローリアは黙ったまま、じつと青年を見つめていた。」

西の訪問者（後書き）

【興奮したあとがき】

こんにちは！とうとう他の部族が出てきました。この展開には私もビックリしています。

この章からは全くなにも考えずに書いてくので、どうなるのか全く分かりませんが、楽しく書いていけたらいいなと思っています。

では、これからよろしくお願いいたします。

赤犬の青年

はや、く……彼を……止、め……て

コリスはハツとした。バツと顔を上げると、シャボン玉のような結界の中を見渡した。

「誰？だれなの？」コリスはビックリすぎて後ずさりしながら聞いた。結界の中で意気消沈いきしょうちんしていると突然、頭の中に響いてきたのだ。

だが、それ以上声はなりを潜め、コリスは沈黙の中でじっと身を縮めていた。

「……聞き間違いかな？でも……なんか気になる……。」コリスはなんとなく不安になりながらも始終しじゅう、首をかしげていた。

その頃、グローリアとあの犬の青年は、互いに宙に浮いたままじっと見つめ合っていた。ただ向かい合っているように見えるが、グローリアの発している空気は重々しく、犬の青年は挑発するように目をキラキラと光らせていた。

「……お前は誰だ。」しばらく続いた沈黙を、グローリアが最初に針をさした。

はんつと軽く鼻で笑うと、青年は赤レンガ色の犬耳の後ろをガリガリ掻きながら「知ってんだろ」とほざいた。

グローリアは眉をよせた。「知らん。少なくとも、お前のような部族は見たことがない。」

己おのれの長く伸びた爪を見ながら「だったらなんだと思う？」と青年は聞いた。かすかに面白がっているようすなのを見て、グローリアは目を細めた。

「知らんと言っただろう。なにも話す気がないのなら私は行くぞ。」

グローリアはチラリと、戦争が起こっている街を見た。そこはもうすでに、犬と猫の部族が空中で激しい戦闘を繰り広げていた。空を魔法の光が、稲妻いなずまのように無数に走っているのが見える。

ただでさえ数が少ないのに、自分がそこにいないということにグローリアは焦りあせを感じていた。このまま行かなければ、あの大勢いる敵を防ぐことができるのだろうか、仲間の誰かが死ぬのではないかとかなり心配していた。

それをかすかに感じ取った青年は、耳をほじるのを止めて、すさまじい戦場を横目で見やった。

「行きたいなら行ってもいいぜ。俺はお前に会ってみただけだからな……。でも」

犬の青年は去ろうとしたグローリアを人差し指を立てて止めると、何も言わずにそのまま魔法を放った。

いきなり目の前が目を開けられないほど眩しい光に包まれたと思うと、グローリアは強い幻覚に囚われた。

青年は光でグローリアを目に集中させたあと、すばやく強い幻覚の魔法を放ったのだ。さすがのボス猫もこれは効いただろうと青年が思っていると、ふと自分の身体が動かないことに気付いた。

「な、なんだこれ。」いつ魔法をかけられたのか全く覚えがない。青年は口以外、少しも動かせなくなっていた。

と、目の前になんと幻覚に犯されているはずのグローリアが立っているではないか。

「こりゃ参った。おめえ、なんで平然と突っ立ってるんだよ。」

「その前に答える。私を足止めしてなにをするつもりだった？」グローリアは恐い顔をしながら問い詰めた。そのすさまじい気迫に、飛んでいた鳥たちはいつせいにいなくなった。

「へへっ、怒りで俺を脅しても意味ねえぞ。俺はただ、純粋にお前と戦ってみたかっただけだよ。別に、お前を足止めをして、その大切なちっこい国を攻めようなんざこれっぽっちも思っちゃいねえよ。」

グローリアはじつと青年の瞳を見つめて、嘘うそではないことを悟さとると怒りを内に引っ込めた。だが、鋭い目つきは相変わらず、青年を突き刺すように静かに見据みすえていた。

青年は動かせない目の変わりに「ふう」とわざとらしく息を吐くと、グローリアに頼んだ。

「これ、解いてくれねえか？ちよつといま耳の後ろが痒かゆいんだ。」

「もう一つだけ聞く。お前は何者だ？」グローリアは無視すると聞いた。

願いが聞き入れられなかったことにため息をつきながら「だから、そんなことお前も知ってるだろ？」と面倒くさそうに言った。

「アホなことを言うな。お前のどこが犬の部族だというんだ。」

「どつちがアホだよ。立派な犬耳にフサフサの尻尾。これ以上なんだって言うんだ。犬の部族しかいねえだろ？」

「・・・だが、お前ほど魔力を持った犬の部族は初めて見た。」

「それは・・・あれだよ、突然変異とつぜんへんいっていうやつだよ。「青年はちよつと口くちもつた。」

一瞬、沈黙ちんもくが流れる。

「……なにを隠している？」グローリアは目を細めた。

「……さあな。俺は秘密をやつらにバレるのが嫌なんだ。だから言わねえのさ。」

青年は口を閉じた。

グローリアは静かにため息を吐いた。やつらとはきつと、犬の部族のことだろう。そう思いながら片手を振って魔法を解いた。とたんに動けるようになった青年は「あー、やっとかける」と言って犬耳をカリカリと搔かいていた。

「……お前に聞きたいことがある。」そんな青年を見ながらグローリアは静かに口を開いた。

青年は手を止めると「またかよ？」と呆あはれて言った。少少うんざりした表情だ。

「我われに危害を加えるか？」強敵と戦うのはなるべく避けたい、そう思うグローリアの落ち着いた表情の裏は、獠とくま猛まうな牙くはが剥むいていた。

だが、

「ああ？そんなことか。興味ねえよ。でも、しばらくはココを自由

に行き来させてもらっぜ。」

青年は腰に手を当てて言った。

その真意は測りかねるが、重要なことを聞いた今は、はやく仲間を助けに行くのが先だった。実は、このとき青年が「はい」と言っていたら、グローリアはこの場で彼を消すつもりだった。

だが、害はなさそうなのを見たグローリアは「危害を与えなければ好きにすればいい。」というと、さっさと街へ去っていった。

「おい、俺の名前はいいのカー？」青年はすでに小さくなったグローリアに叫んで呼びかけた。

だが、返事は返ってこなかった。すでに、グローリアの意識は戦いに集中していたからである。

「ちえっ、せつかくの仲間なのに……。まあ、どうせ名前を聞かなくても、まだ無いんだけどな。」犬の青年はポツリと呟いた。

赤犬の青年（後書き）

【あとがき】

遅くなってしまい、待っていた方は本当にすいません。

実は、これから火曜日更新はやめて自由に書いていこうと思っ
ています。急にすいません。ですが、楽しく書いていこうと思いま
す。どうぞよろしくお願いします。

再会と戦争

コリスはしばらく考えていた。それは、さっき聞こえてきた声のこと。可愛らしい、空のように澄んだ声。きつと、声の主は女性なのだろう。でも、一体なぜ？どうして僕に「彼を止めて」と言ったのだろう。それに、「彼」とは？ コリスは答えのない疑問に、頭をぐるぐるとさせていた。

ふと、コリスはいつの間にか、目の前に薄い水色の壁が迫っているのに気が付いた。コリスはビククリして後ずさった。

「うわっ！ な、なん・・・?!」コリスは慌てて離れようとしたが、コリスを包んでいるシャボン玉は容赦なくゆっくりと進んでいってしまう。

そして、まるで吸い込まれるようにシャボン玉型の結界が、薄水色の壁に埋め込まれていった。コリスはビククリしすぎて全身の毛を逆立た。そして目を皿のようにして見ていた。なんと、その壁の向こう側には、町があったのだ。どうやら、この壁は町の結界のようだった。

「コリスくんー！！」突然、町のほうからシーリーの叫び声が聞こえてコリスはビククリした。

声のしたほうを見ると、人間の姿をしたシーリーがものすごいスピードで飛んでくるのが見えた。コリスはどうしてここにシーリーがいるのか分からずに目をパチクリさせた。

「よかったー！！コリス君は無事だったんですね？！よかったよかったです！」

シーリーはバツと勢いよくコリスに抱きつくと、しめつけんばかりにコリスを抱きしめた。シーリーの胸に押し付けられて、コリスは身体が潰れるかと思うほどの苦しみを味わった。

「く、苦し・・・い」興奮冷めやらぬようすのシーリーにどうにか離してもらった。すると、ふと、いつの間にかグローリアがかけた結界が、なくなっていることに気づいた。

「あれ？シャボン玉は？」

「そんなことより、ここは危険ですからこっちへ行きましょう！」

「えっ？」コリスはシーリーにガツチリとガードされて、安全な場所へとさっさと連れて行かれた。

あとで聞いた話なのだが、あのシャボン玉結界はグローリアがあらかじめ、シーリーが触れたら消えるようになっていたらしい。もし、シーリーが来なかったらそのまま町の安全な場所へ向かっていったという。

「じゃあ、ここにいてくださいね。」

シーリーに連れられた場所は、素朴で少しおしゃれな雰囲気のパ

ブの中だった。コリスは安全な場所がこんなところでいいのかと少し不安に思ったが、コリス以外にも弱っているお年寄りや戦いに慣れていない若い猫たちが身を寄せ合っていたので、安全な場所なのだろうと思いついた。

「あれ、シーリーはどこにいないの？」コリスは入り口に向かうとするシーリーにあわてて声をかけた。

コリスの不安げなようすを見て、シーリーは柔らかく微笑むと安心させるようにいった。

「大丈夫ですよ。私は戦いには参加しませんから……。ただ、それでも私に出来ることはいくらでもあるんです。だから、それやりに行くんです」

「え……。僕……」コリスは不安そうに耳を下にたらしめた。

「ふふ。若いのが、そんなに不安にならなくても、ここにはみんないる……。その子は、結界をつくりに行くんじゃないよ。」

突然、コリスの後ろの椅子に腰掛けていた老女が口を挟んだ。コリスはビククリして振り返った。シーリーはお婆さんに申し訳無さそうな顔をしている。

シワくちゃのお婆さんは優しく笑うと、シーリーに行くよううながした。

「さあ、お行き。私たちは大丈夫じゃ。この子は私が見ておいてあげるよ。」

「すみません、じゃあコリス君。ここにいてくださいね？おとなしくですよ」

シーリーはそういうと、急いだようすで出て行ってしまった。コリスは何か言おうとして口を閉ざした。どこか、切羽詰っているようで、とても止めれる雰囲気ではなかったのだ。

「……シーリー……」コリスは心細くなってシヨンボリと肩を落とした。

「まあまあ、そんなしよげなさんな。彼女にはまた会えるさ。あの子は魔者じゃないのだろう？」

お婆さんが励ますようにコリスを見た。コリスは肩を落としながら、チラリと老婆を見た。

「……そうです。でも……僕、なにがなんだか分からなくて……」コリスには何が起きているのかすら分からない。

何があつて、こんなことになつてるのか……？コリスは突然やつて来た、あの恐ろしい青年や、グローリアが自分を引き離れたことにも混乱していた。結界の中に急に、聞こえてきた声も、なんにもかもがよく分からないことだらけだった。そこに、やっと会えたと思つたシーリーはあつという間に行つてしまふし……。コリスは一匹ぼつちにされ、不安で押しつぶされそうだった。

「……グローリア……」コリスは涙が溢れそうになった。

見かねたお婆さんは、座っていた椅子を近づけると、コリスの脇に手を入れて「よいしょっ」と抱き上げた。

「うわっ?!」コリスはビックリして目を見開いた。

いかんせん、コリスは子猫の中でも身体が小さいほうだが、それでもお婆さんの手は少し心細そうにプルプル震えていた。

お婆さんは涙でぬれている水色の瞳をのぞきこむと、力強く言った。

「これしきのこと泣くんじゃやない。男の子じゃろう?男の子は、めったなこと泣いてはいけなけんじゃ。じゃから、めったなことでは泣くんじゃやない」

お婆さんの真剣な顔に気圧されたコリスは動揺しながらこくと頷いた。出かかっていた涙もいつの間にか引っ込んでいた。

「でも・・・、僕なにがどうなってるのか分からないんです。なにがあつたんですか?」

「今は犬の部族が襲ってきて戦争をしておる。じゃから、ここにいたほうが安全なんじゃ。万が一、敵が結界を破ってきたとしても、ここなら強い魔法がかかっておるから安心なんじゃ・・・」

コリスは驚愕きょうがくした。戦争・・・?コリスはお婆さんの手からすり抜けると、外へと飛び出した。

もし、グローリアと一緒に見たあの影が全部、犬の部族だったら・・・?青空を埋めつくすほどの敵の数に、コリスは戦慄せんりつが走った。

三毛猫と青い猫

コリスは風のように走った。そして、すべるように店の外へ出ると、コリスは息を飲んだ。

「う、う・・・わ」コリスは余りの驚きにへたりと腰を落としてしまった。

町の上空には、薄い結界の向こう側でだが、ものすごい戦いが繰り広げられていた。光が走り、爆発があちこちで起きていた。空が魔法で埋めつくされ、無数の戦士たちが飛び交っている。

シーリーに連れられたときは、上を見ることができなかった。もしかしたら、シーリーはこの光景を見せたくなかったのかもしれない。コリスは初めて見る壮絶そうげつな光景に、圧倒されて目が釘付けくぎつけになった。

「大丈夫か？若いのに。しっかりせんと。」

後ろから急に押されてコリスは飛び上がった。パツと振り返ってみると、年老いた毛長の猫が佇たたずんでいた。コリスはその猫を見て、ハツとした。さっきの人間のお婆さんだ！！

コリスはきよとんとした。どうして人間じゃなくて猫の姿なんだろう？

すると、お婆さん猫は優しい瞳の奥に力強い輝きを光らせながら言った。

「なにを怖気づいとる。お前さんも大きくなれば、あそこへ突撃せねばならんのじゃぞ。もつとも、魔者になればの話じゃが。」

コリスはそれを聞いて全身の毛を逆立てた。また戦場を見上げる。あの恐ろしい場所に行く？それを想像しただけで、コリスは死を見た気がした。

「安心しなさい。お前さんはまだ無理じゃ。じゃから大人しく中へ入ろう。」そうコリスをうながすと、猫のお婆さんは、安全なバーの中へ入ろうとした。

だが、コリスは行かなかった。外へ出たのには別の理由があったからだ。コリスはお婆さんに叫ぶと走り出した。

「お婆ちゃんはそこに居て！僕、すぐ戻ってくるから！！」

魔法が交差する激しい死の戦場の下で、大切な人を見つけるために。

「グローリア！！シーリー！！！！」

「なんてザマだ、こりゃ。まさか、ここまでだとは……。」

赤犬の青年は、呆れたように戦場を見下ろしている。グローリアと別れてからしばらく戦争の様子を観ていたのだ。だが、彼の想像していたようなものではなかったらしい。己の部族を見て、赤犬の

青年は口をへの字にした。

“犬の部族”と“猫の部族”の戦争はいつも互角だった。

個々の力は小さくとも、数で圧倒している犬の部族。

個々の力は強くとも、数が圧倒的に少ない猫の部族。

二者は激しくにらみ合っていた。

だが、今回はグローリアがいなかった。それだけで犬の部族は少し有利になっていた。魔者が一人減るだけでこのザマだ、と猫の部族は苦しい思いをしていた。

すると、グローリアがやってきた。赤い犬の青年を振り切り、やっと戦場にこれたのだ。戦場についたとたん、足止めの影響が大きかったことを知り、とたんに厳しい顔になった。

「はやく出ていけ。でないと、死を見ることになるぞ。」しばらく戦ってから、グローリアが警告するように言った。

グローリアが戦場に来てから、あつという間に勢力が互角こかくになった。しかし、弱ったことに、犬の部族では負傷者ふしやうしゃが後を絶たなかった。それを見たグローリアが威嚇いかくするように言ったのだ。犬の部族はしぶしぶ引きあげることにした。

昔からのルールで、猫の部族はどんなに攻められようと相手を殺したりはしないという掟があった。皮肉なことに、犬の部族はそのおかげでいつも救われているのだった。

帰って行く犬の部族を、魔者たちは厳しい目で見送った。そして、ケガを負った魔者は治療ちりょうするために町へと静かに下りていった。

「・・・どうやらケガ人が少なくてすんだようだな。亡くなった者はいないか？」グローリアが周囲を確認しながら聞いた。

一人の若い魔者が報告しに行った。

「いないようです。よかったですね。・・・でも、今回はあなた様がいなくて、どうなるかと思いましたが・・・。」

青い髪をした青年がグローリアにそう告げた。その顔はまだ緊張したように少しこわばっている。

「すまない。少し変なやつに足止めをくらっていたんだ。」

「そうなんですか？おかしいですね。今までそんなことなかったのに・・・。」青年は不思議そうに顔をしかめた。

グローリアは町へ顔を向けた。そして、首をかしげている青年を残して町へと帰っていった。

戦争がひと段落する少し前。そう、コリスが街へ駆け出しているころ、コリスは町の中で不思議な光景を見ていた。

シーリーのように魔者ではない仲間たちが道に立って、手を上に上げていたのだ。コリスは心の中で、あれがあのお婆ちゃんが言っていた、結界をつくるってことなのかな・・・？と不思議そうに横目で見ていた。

「おい！だから外に出るなっっていっただろ！！」

突然、怒鳴り声^{こゑ}がしてコリスは飛び上がった。思わず足を止めて、辺りをキョロキョロする。まるで自分に言われているようでコリスはビクビクした。

すると、離れたところに二匹の猫がいた。一匹は深い青色の猫で、身体に黒い模様^{もよう}が走っている。そして、もう一匹はきれいな三毛猫^{みけねこ}だった。どうやら二匹は言い争っているようで、コリスはきよとんとしながらその二匹を見つめた。

「ミケ！お前は身ごもってるんだから、戦いに行くなってみんなにも言われたろ！？」

「いやよ！私だって魔者なのよ！？あれを見たらじつとなんかしてられないわ！！あっち行ってて！」

必死なようすで青い猫が三毛猫に訴えているが、三毛猫は青い猫を聞き入れようとせず空に向おうとしていた。どうやら、あの三毛猫はお腹に子供がいるらしい。

青い猫は堪たらず人間になると、三毛猫を捕まえてがっちりかくほと確保した。そして、三毛猫がもがくまえに瞬間移動してしまった。きつと安全な場所に連れてったのだろう。

魔者でお腹の中に子どもがいるって珍しいんじゃないのかな？と思いつつ、コリスは呆然としながらも横目でその消えた場所を見つめながらまた走り出した。

三毛猫と青い猫（後書き）

【あとがき】

気付いている人もいるかもしれませんが、実は、戦争が終わったあとにグローリアに報告している青い髪の青年と、三毛猫と一緒にいた青い猫は同一人物です。

この三毛猫、名前を「ミケ」と呼ばれてましたが、愛称です。本名は「ミュミラン」。言いくいすね。

テヴォルト

「シーリー！！！！」

しばらく走っていたコリスは、人影の中にシーリーの後姿を見つけた。その声を聞きつけたシーリーはハツとして、あわてて後ろを振り返った。

「コリス君?! どうしてここまで来たんですか?!」シーリーは怒るようにそう言った。

初めて怒った顔のシーリーを見て、コリスは怯んだ。立ち止まるとしゅんと耳を下げる。

「だ、だって、シーリーがいなくなったから・・・! どうして居なくなっちゃうんですか!」コリスは叫んだ。

「あのおとき言ったじゃないですか! 私は結界を作りに　　!」

すると、他の場所から怒鳴り声が聞こえてきた。

「テヴォルト! 言うことを聞きなさい。何度言ったら分かるんだ?」

「嫌だ!! なんでオレがあそこに行っちゃいけないんだよ?!?!」

銀色の長い髪をした美しい男に、挑みかかるように言う幼いトラ猫。それは以前、コリスが噴水で見かけたあのトラ猫だった。

金色の模様にこげ茶色の毛。それと、銀色の髪 of 男性もコリスには見覚えがあった。

「あ、おじさんに怒られて落ち込んでた人だ」

「え？エリアス様のこと？」シーリーが驚いたように聞いた。

「まえグローリアと一緒に噴水で見かけたんですよ。あのトラ猫も。」

コリスは数日前に会ったトラ猫をじっと見つめた。ずっとコリスはあの時から気になっていたのだ。

「エリアス様はつい最近、あのトラ猫君の師匠になったんですよ。大変そうですね。」

そこまで言ってシーリーはハツと思い出した。

「そうじゃなくて、コリス君！ここは本当に危ないんですから、あそこから出ちゃいけないって言ったじゃないですか！」

「だったらシーリーも危ないじゃないか！僕だって、僕だって必死でここまで……。」

「私は大丈夫なんですよ。いざとなったら自分で結界を作って身を守れますから。それより一番危険なのはコリス君です！魔法もまだ使えないのに、いざ町の結界が破れでもしたら……。」

と、くどくどと説教をされて、コリスはなにとも言えなくなっ

まった。心配してここまで来たのに、それも言えず仕舞いだ。

「とりあえず今は何かあったら守りますから、もう二度とこういうことはしないで下さい」

凄みのあるシーリーに気圧されて、コリスは落ち込みながら大人しく頷いた。先ほどのトラ猫を見ると、エリアスはもういなく、トラ猫だけが残されていた。どうやら言い争いに負けてしまったらしい。そして、なぜか、座ってじっと上の戦争を見上げていた。

「ねえ、シーリー。あそこに行ってもいい？」コリスはトラ猫を前足で指しながら、恐る恐るシーリーを見た。

シーリーは釣りあがった目で指された場所を見ると、トラ猫に目をとめてふっと目を和らげた。

「いいですよ。でも、遠くへは行かないと“今度こそ”約束してくれませんか？」

シーリーは真剣な目でコリスの瞳を覗きこんだ。コリスは力強く頷いた。

シーリーから離れたコリスは、トラ猫のほうへ近づいて行った。トラ猫は相変わらず真剣な目で、戦場を見ている。

だが、その薄茶色の瞳には恐れとは裏腹に、はつきりとした憧れが映っていた。コリスは戦場を見上げた。とてもじゃないが、あれに憧れを抱く気には全くなれなかった。

「どうしてあそこに行きたいんですか？」コリスは思わず聞いた。

幼いトラ猫はチラツとコリスを見た。だが、すぐにそ知らぬ顔で視線を戻した。コリスは返事が返ってこないのでムツとしていて、トラ猫がぼそつと呟いた。

「なんで敬語で聞くんのだ？」

「え？」コリスは目をパチクリさせた。

トラ猫はこつちを向くと、「だから、なんで敬語なんだって言うてるんだよ」と睨んだ。

コリスは自分でもよく分からなくて首をかしげた。「どうしてそんなことを聞くんですか？」

「変だから」

コリスはその言葉にムツとしながらも、トラ猫の隣に座った。

「僕がどう喋ろうと僕の勝手です」

「へーえ？じゃあなんであそこに行きたいと思わないのさ」

トラ猫は挑発的にそう言うと、コリスを舐めまわすように見た。

「お前、いつくだ？」

「え？」コリスはすっとんきょうな声で言った。

「だーかーらー、いくつだって聞いたんだよ！」トラ猫は少しイラついたように言った。

「え、6ヶ月だと思えますけど・・・たぶん」コリスが思い出しながら言った。

トラ猫は目をパチクリさせると、ハハハと笑い始めた。「お前、ホントに6ヶ月かよ！？3ヶ月の間違いじゃねえのか？」

コリスは普通の子より身体が小さいので、どうしても幼く見えてしまうのだ。コリスはムーツと頭にきた。

「君こそどうなんだよ！」コリスは食ってかかるようにそう言った。

「オレか？オレは9ヶ月だよ」

9ヶ月といえば人間で13歳くらいだ。コリスはぐっと言葉を詰まらせた。ちなみに、コリスは9歳くらいの年齢だ。

「お前・・・怖いのか？」トラ猫は見下した目でコリスを見た。

「なにがですか？」

「だかーらー、戦場に行くことだよ！」

「そりゃあ、怖いですよ」コリスは前足をそろえながら言った。

「へーえ。じゃあなんで怖いんだ？」

「死ぬかもしれないから」

トラ猫は薄茶色の目でじっとコリスを見つめた。黙ってコリスもトラ猫を見つめ返した。

「オレは早く戦場に出たいんだ。」

トラ猫はそういうと、じっと戦場を見上げた。コリスは怪訝な顔つきで彼を見た。

「変に思うか・・・？早く戦いたくてうずうずしてくるんだ。ほら、今も尻の毛が逆立ってるのが分かるだろ？」

トラ猫は少しお尻を持ち上げてみせた。コリスはどうしてそんなに戦いたいのか、よく分からなくて目を細めた。

「どうしてそんなにも戦いたいと思うの？」

「分かんねえ。でも、どうしてもあそこに行きたくなっちゃう。それで師匠に言ってみたけど、結局さっきのざまさま」

コリスはハツとした。トラ猫はさっきコリスが見ていたことを知っていたのだ。

「ごめん・・・」コリスはなんだか申し訳なくなった。

「・・・お前変わってるよな。そついやお前さ、名前なんて言っただ？」

「え？コリスだけど」

「オレはテヴォルトって言うんだ。テオでいいよ」

コリスとテヴォルトはいつの間にか仲良くなっていた。

テヴォルト（後書き）

【あとがき】

第二章『金のトラ猫』に出てきたエリアスとテヴォルト（金のトラ猫）が再登場しました。

忘れてる方もいらっしやるかと思ったので、どこに出てるのか書いておきました（笑）

どうぞこれからもよろしくお願いいたします。

シーリーの悪い癖

「・・・それで？なぜここにお前がいるんだ」

空から降りてきたグローリアは、コリスを見て目を細めた。

テヴォルトはすでにこの場には居なかった。戦争が終わったときに帰ったのだ。

コリスは何も言えずに身体を縮こませた。まさか「パブから抜け出してきました」なんて言えるわけもなかったのだ。

しかも、さつきシーリーにしこたま怒られたばかりだ。そう言えばグローリアが怒るとコリスは思い、コリスは黙ったままだった。

戦争が終わり、シーリーを探していたグローリアがここへやって来た時、コリスが一緒にいるのを発見したグローリアはとたんに表情が曇った。

なぜ安全地帯ではなく、あそこにコリスがいる？終戦してから来たのか？

流れてシーリーに話を聞いたグローリアは眉をひそめた。わざわざ抜け出してきただと？

コリスを振り返る。

グローリアの厳しい表情にビクツと震えたコリスは、怒られる・
・と思い、ぎゅっと目を閉じた。

だが、グローリアは怒りはしなかった。

「どうしてあそこを出たんだ？」そうコリスに聞く。口調もいたって普通だった。

「えっと・・・、あの・・・。」コリスはてっきり怒れると思っていたので、一瞬とまどった。

グローリアはコリスが何か言うのを待っている。

コリスはツバを飲み込むと、口を開いた。

「あの、グローリアとシーリーが心配だったんです・・・。
せ、戦争で、死んじゃうんじゃないかって・・・。」

コリスは目がかすんでいくのが分かった。必死で探し回っていた時の気持ちだが、いま溢れてきたのだ。

シーリーは、はっとした。シーリーはまさかコリスがそんなことを思っていたとは思わなかったのだ。シーリーはコリスが必死になつて町を駆け回っている姿を想像した。

しかも、自分やグローリアのことを思って……。

途端にシーリーはコリスに謝りたくなかった。一方的に怒ったことを猛烈に後悔して自分を責めていた。

グローリアはそれを聞いて、泣いているコリスを抱き上げた。

「心配するな。私たちは死なない……。申し訳なかったな、一緒に居てやらなくて……」

グローリアはそう言うと、コリスを抱いた。グローリアに抱きしめられたのは初めてだった。コリスはグローリアの首元に顔をうずめてしゃくり上げた。

「……では帰るか。シーリー……ん？」

シーリーは泣いていた。

それを見たグローリアは何かあったのだろうと思い、「どうした？」と声をかけた。

「わ、私……、コリス君に酷いことを言っちゃったんです……」

シーリーはひどい自己嫌悪に陥こぼっていた。

それを見て、以前にも似たようなことがあったということをグロ

ーリアは思い出していた。そのひどく落ち込む癖がシーリーの悪い所だということをグローリアは知っていた。

「……シーリー、自分を責めるな。いいか？反省はしても、決して自分を責めるんじゃない。コリスには後で謝ればいいじゃないか。さあ家に帰るぞ。」

グローリアはそう言うと、疲れてうとうととしているコリスを抱いて、すっかり星が出ている夜空へと跳んだ。

「……はい。」シーリーはそう言われて立ち直ると、グローリアを追いかけて行った。

・・*・*・*・*

翌日

「コリス君、ごめんね。」シーリーは申し訳なさそうに言った。

シーリーのいつもピンツとしている白い耳やヒゲが、元気なく下がっていた。

「え?!」コリスは驚いた。

無事に家に帰ってきたコリスたちは夕食を食べて眠りについた。フォークスの家に行ったり生まれて初めて戦争を見たりと一日中気が抜けなかったコリスはぐったりしていた。そしてあつという間に眠ってしまったのだ。

シーリーはそのまま謝ることが出来ずに翌日を迎えたのだった。

「な、なんでシーリーが謝るの？」コリスはビックリしたまま聞いた。

「あの、ほら昨日の。あの時、コリス君の言いたいことも聞かずにまくし立てたりして・・・本当にごめんなさい！」

シーリーはしどろもどろに言うと、バツと頭を下げた。コリスはビックリしすぎて口を開けている。

グローリアはその様子を微笑みながら見ていた。

「え、あ、あの時はシーリーの言う通りだったし、僕も悪かったですから・・・」

コリスはあわあわしながら、どうしたら良いのか分からずにグローリアを見た。

人間の姿で椅子に座っていたグローリアは、心底困ったようすのコリスに怒りはないと見て、コリスに助け舟を出すつもりでシーリーにいった。

「コリスは怒ってないそうだぞ？」

「そ、そうですね！怒ってなんかこれっぽっちもないよ！」

「・・・ほ、ほんと？」シーリーは恐る恐る顔を上げながら聞いた。

「ほんとです！ほんと」コリスは強調していった。

とたんに安堵した顔を見せたシーリーは「よかった」と言って弱々しく笑った。

コリスも笑ってくれたシーリーにほっとしつつ、一緒に笑った。

「私の悪い癖ですよね・・・。勝手に相手に決め付けて・・・。

拳句の果てに感情的に怒ってしまうんです・・・。サロのときも・・・

」

シーリーはその時のことを思い出して、はあとため息をついた。

コリスは「サロ？」と首をかしげた。

「私の幼馴染なんです。サロフィスって言って、青くてきれいな灰色模様をしてるトラ猫なんです。前に、私と彼が大ゲンカしてそれで仲たがいでしてしまって・・・。それが今も続いているんです。」

シーリーはしゅんとして、さっきよりも弱々しく微笑んだ。コリスは聞いた。

「どんな理由でケンカしたの？」

「たわいもないことですよ。ただ、毛玉を目の前で吐いたとかそういうのです」

コリスは絶句した。目の前で吐いたんだ……。それってどつちが吐いたんだろう？コリスは気になって仕方がなかったが、聞かないでおいた。

毛玉を人前で吐くというのは失礼な行為なのだ。

コリスはその疑問を、そっと心の中にしまっておくことにした。

シーリーは、コリスがちょっと誤解していることに気付いていなかった。

魔者の暗黙の掟

「そういえば、町を走ってるとき青い猫を見ましたよ、僕。」
「コリスはふと思いついた。」

「えっ、ほんとですか？」
「シーリーは驚いて目を見開いた。」

「うん。なんか、きれいな三毛猫と言いつ争っていましたよ。」

それを聞いてグローリアが反応した。

「ミュミランか？　そういえば、あいつ、戦争に参加したんじゃないだろうな……。」

グローリアが怪訝な表情で呟いた。

「あ、それは大丈夫でしたよ。サロフィスさんか分からないですけど、その青い猫が羽交い絞はがめにじしてましたから。」

「そ、そうか。それならいいんだが……。」
「グローリアはほっとしたようにいった。」

「きつとサロですよ。サロは今ミュミラン様と一緒に住んでますからね。」

シーリーが言った。コリスはそれを聞いて妙に納得した。

「じゃあ、サロフィスさんが父親なんですね。あのお腹の子どもの
コリスはミュミランが妊娠していたことを思い出していた。」

シーリーの耳がピクリと動く。だが、グローリアは首を振った。

「いや、違つぞ。ミュミランがサロは違つと言っていた。だが、あ
いつ・・父親が誰か分からないとは・・・・・。」

グローリアは顔をしかめた。

「ミュミラン様でも分からないんですか？じゃあ誰が父親なんでし
ようね。」

シーリーはワクワクしたようすで尻尾を振った。コリスは水色の
目を瞬かせた。

「え、父親が誰か分からないんですか？」

「ああ。まあ、生まれてみれば分かるかも知れんが。一体、発情期
で何をすればそうなるんだ・・・。」

心底呆れたといった表情でグローリアは呟いた。

「え、発情期??」聞いたことのない言葉にコリスは戸惑った。

「ああ、4年に一度、我われの部族には発情期が起こるんだ。毎回、起こる季節は違うが、去年は秋に起こったな。」

と、グローリアは確認するようにシーリーを振り返った。

「そうですね。確か、稲いねの刈り入れ時だったような気がします。」

この世界に「10月」という日付の概念はない。その代わりに、一年を「春夏秋冬」の四つに分けている。

そのため、細かい時期を言うときには「稲の刈り入れ時」のように「いねの花が咲く頃」という表現を使ったりするのだ。

「あの・・・、そもそも発情期ってなんですか？聞いたことないんですが」

その言葉を知らないというコリスを珍しく思いながら、グローリアが簡単に説明した。

「ああ。子どもを作る時期のことだ。」

「それか、恋の季節とも言いますね」シーリーは嬉しそうに言った。

「みんなが恋人を作るんですよ。気になってた異性を誘って一夜だけ夜を明かすんです。それはそれはロマンチックで、とっても神秘的なんですよ。みんな誘い方は違いますが、魔法にそれぞれ思いを込めて魔法を放つんです。すっごくキレイですよ」

「へー、どんな魔法を使うんですか？」

コリスが聞いている間、密かにグローリアは安堵あんどしていた。部族の説明をしていたときも、たわいもない会話をしていたときも、グローリアは気になっていたことがあった。それは、

コリスが普通の子よりも言葉を知っているということ。

「結婚」という言葉を使った時も、コリスはすでにその言葉を知っていた。しかも、会話していても普通に話せて語る点から、どこでそれらの言葉を覚えたかは分からないが、そのことにグローリアはどこか薄ら寒いものを感じていた。

だが、コリスが「発情期」という言葉を知らないと知った時、グローリアは安堵したのだ。

むしろ、普通の猫に囲まれて育った（コリスのような）猫は、普段、喋ることもないのだから、本来人間の言葉を知らないことが多い。それをさらに陵駕りょうがするほどの知識をすでに持っていたコリスは普通ではなかった。

だが、グローリアはそのことについて、それほど重要視していなかった。それはコリスが自分たちよりも好奇心が強いということが起因きいんしていると、グローリアは思っていた。

きつと、どこかで人間たちが喋っていたのを聞いて覚えたのだろ

う。なんにでも興味を持つコリスなら、それはなおさらだ。

「　　つて感じですよ。ちなみに、その時にあわせて人間たちもこぞって結婚する機会が多いんですよ。人間にとっても、その時期はとても重要な時期なんです。」

コリスの目がキラキラと輝いている。

「すごいんだね、発情期つて！僕も見てみたいですよー」

「4年後にな。その時になればいくらでも見れるぞ」「グローリアはそのようすに微笑んだ。

「そうですね、私もその時にあわせて色々準備しないと。」

「準備つてなんですか？」コリスはシーリーを見た。

「相手を探すんですよ。そういえば、グローリアはどうするんですか？」

シーリーは猫の姿で、椅子の上で横になっているグローリアを見上げた。

「私はいつもどおり家に居るつもりだが・・・。」「グローリアは困ったような顔をした。」

なぜそんなことを聞くんだ……。グローリアはげんなりしていた。

「なんで？ どうして参加しないんですか？」疑問に思ったコリスが純粹な目で見た。

グローリアは困った顔をして耳を後ろにまわすと、黒い前足を重ねた。

「普通、魔者は子どもを作らないからな。それに、私はもう発情期には興味がない。まあ、ミュミランのように、子どもを作るやつもいるが」

「あ、やっぱり子どもは作らないんですね。」

「ん？ 知っていたのか？」

「あ、いやなんとなくそうじゃないのかと思ってて」コリスは慌てていった。

「でも、なんで子どもを作らないんですか？」コリスは聞いた。

「実はな、魔者にはそういう暗黙あんもくの掟おきてがあるんだ。強制ではないが、以前、子どもを持った魔者が戦死したとき、その子どもが自殺してしまったんだ。元々、心の弱い子だったんだが……。」

「え……！」コリスは目を見開いた。

「それから、魔者の間では極力子どもは作らないようにしていったんだ。魔者は戦士だからな。他の者たちより死に晒されやすいんだ。」

「そうなんですか……。」 コリスは耳を下げた。

「だが安心しろ。私たち弟子を持つ者はそう簡単に死にはしない。この二つの尻尾にかけて誓う。」

グローリアのその赤い瞳は真剣に輝いていた。 コリスはその瞳を見つめた。だが、どこかで不安の灯火がまだ消えていないのを、 コリスは感じていた。

魔者の暗黙の掟（後書き）

【補足】

基本、シーリーは二又の猫に対して「様」をつけます。つけないのはグローリアだけです。

あとは何か質問があれば書いてくださいね。矛盾とか大歓迎です。がんばって考えます。

黒い影

「ああ、分かった。昼頃に行こう。」

朝起きてみると、グローリアの話し声が聞こえてきた。黒猫のグローリアは暖炉に向って話しかけている。

コリスは首をかしげてグローリアの元に行くと、暖炉の中を覗きこんだ。だが、小さな炎がパチパチ爆ぜるだけでなにも変わったところはなかった。

「??？」

「エリアスがどうやら私と話がしたいらしい。」グローリアはそう言っただち上がった。

「え？そんなんですか？」コリスは驚いた。どうやって連絡をとったんだろう？

「ああ。昼を食べたら街に行くが・・・一緒にくるか？」

「！はい！」コリスは飛び上がらんばかりに喜んだ。

普段、あまり家から出ることが少ないコリスにとって、色んなものがある街は魅力的だった。グローリアの家は町から離れた森の中にあるので、あまり町にもいけない。しかも、森に入ることは禁止されていた。

森の中は猛獣がたくさんいて危ないのだ。

そのため、グローリアはシーリーと家の周りに結界を張り、獣が入って来ないようにしていた。

なので、今回は久々の町に行けるとあって、コリスは大喜びしていた。

犬の部族との戦争があつてから数週間が経っていた。

最初は、戦争があつたせいか町に対して怖い気持ちを感じていたが、日が経ち、どんどん家にいることに飽きてくるとコリスは町に行つたときのことを思い出すようになっていた。

また、あの不思議な噴水に行つてみたい。今度は自由に歩いて回りたい。あの戦争のときは、探検する余裕もなかったのでコリスは次に行くのを結構楽しみにしていたのだった。

だから、喜びもひとしおだ。

「コリスくん、ミルクが冷めちゃいますよ?」

コリスがぼんやりしていると、シーリーが声をかけた。

「はい。」

この際、どうやって連絡を取ったのかは忘れよう。

グローリアは、もうすでにテーブルについて食べ始めていた。

・・*・*・*・*

「じゃあ行ってくる。」グローリアが玄関のドアを開けながら言った。

「はい、気をつけて行ってらっしゃいませ。あ……、私も行くのかな？」

シーリーが突然そういった。

「えー！シーリーも行くの？」コリスは驚いて目を瞬いた。

「行くのか？」グローリアが確かめた。

「じゃあ、私も行きます。すいませんが、ちょっと待ってて下さいね。」

と言い残してシーリーは家に引っ込んだ。

「シーリーも行くんですね？やったー、嬉しいな」コリスはにっ

こりして言った。

今まで三人で出かけたことがなかったので、コリスは嬉しかったのだ。

「ああ、そうだな。」グローリアはそんなコリスを見て優しく微笑んでいた。

「はい、お待たせしました」

家から出てきたシーリーを見て、二人は啞然とした。

「お前……それ持つてくのか？」グローリアが呆れていった。

シーリーは大きな風呂敷を持っていた。何が入っているのか分からないが、そうとう大きい。シーリーが背負うと身体からはみ出るほどだ。

「いいじゃないですかー。これ作るの大変だったんですよ？これでちょっとくらい、家計の足しにしないと」

シーリーはニコニコして言った。コリスはぼかんとした。

「いつの間にそんなに作ったんだ？」

「家事の合間に、ちょこちょこ作ってましたよ？」

グローリアは、そうだったか？と首をひねった。

「……それ、なんですか？」コリスが我慢できずに聞いた。

「魔法で作った造花ぞうかですよ。これをお店に売ってお金を稼ぐんですよ」

「へーえ……」コリスは何ともいえない表情だった。

「……まあとりあえず行くか。コリス、こっちに来て」グローリアが呼んだ。

コリスはしゃがんでくれたグローリアに飛びつくと、優しく腕に抱かれた。シーリーはグローリアの横に立つ。

グローリアはそれを確認すると、結界を解いた。シーリーも続いて解く。

「コリス、少しビックリするかもしれないが手を放さないでくれ。」

え？ と言う間もなく、コリスは突然身体に圧迫感あっぱくかんを感じてビックリした。

そして、パツと目の前が変わった。三人は町の中に立っていた。グローリアが瞬間移動をしたのだ。

猫の部族は普通に移動に使ったりするのだが、飛ぶよりも身体に

魔法の負担がかかるため前は使わなかった。

だが、シーリーやグローリアが日常的に魔法を使い、ここ最近コリスの身体が魔法に慣れてきていたので、今回は使うことにしたのだ。

「うわあ……。」コリスは久しぶりの町に目を輝かせた。

落ち着いたレンガ色の建物が立ち並び、たくさん人が歩き回っている。この町には市場があり、そこは特に活気付いていた。

街中に突然現れたグローリアたちに人々は驚いている。何に驚いているかというと、大きな風呂敷を持っているシーリーに驚いていた。

一番目立っている。

「……目立ちますかね。そんなに」シーリーは人目を気にして言った。

「みんな見てるね。」コリスも見られていることにちょっとドキッとして言った。

「とりあえず、私とコリスはパブに行くが、シーリーはどうするんだ？」グローリアが気になって聞いた。

「あ、私も一緒に行きます。丁度、その近くに目当ての店があるの

で

コリスは相変わらずグローリアの腕に抱かれていたが、今回は身
を乗り出してもグローリアに怒られなかった。前は過保護なくらい
コートの中に入れられていたのだが。それで、コリスは嬉々として
町を見ることを楽しんだ。

そうこうしている内に居酒屋についた。コリスにはその店は見覚
えがある。戦争のときに連れてこられた店だ。落ち着いた感じのパ
ブなのだが、なんだかコリスはあの時のことを思い出して身体を縮
こませた。

「じゃあ、私はあっちの店に行きますから」

シーリーが言っているお店は、女の子が好みそうなかわいらしい
お店だった。シーリーは行こうとした。

「あ、まってシーリー！僕も行っても良い？」コリスは慌てて止め
た。

「え？コリス君も？」シーリーはちょっと驚いた顔をした。

「うん。その・・・ちょっと・・・」コリスはなんとなく、言いつ
らそうにグローリアを見た。

グローリアはすぐに察して、

「ああ、行ってこい。」

と言ってくれたので、コリスは安堵した。

初めてグローリアの腕から降ろしてもらい、コリスは視線が一気に下がった。ちょっと戸惑い気味に足を踏みしめる。

グローリアはそのままパブの中に入り、シーリーとコリスは二人でお店に向った。

・・*・*・*・*

その頃、エンブラン国の近くに薄暗い雲があった。その雲は徐々に風によって国に近づいてきていた。

それを、一人の青年が見ていた。赤レンガ色の犬耳に、ふさふさの尻尾。あの犬の青年だった。

「とうとうここまで来たか……。」「青年はそう呟いた。その表情は暗い。」

なにか、不吉なものがエンブランに近づいている。そのこと、まだ誰も気付いていなかった。彼以外は。

青年は静かにその場を去っていった。

魔法の花

「いらっしやいませ。なにか御用ごようですか？」

可愛らしいきらびやかなアクセサリーが並ぶ店内で、中年の女性店員がそつたずねた。シーリーの持っている奇妙な風呂敷風呂敷を見て怪訝げんな表情をしている。

そりゃそうだろうなあ、とコリスは思いながら足元からシーリーを見上げた。

シーリーはそんなことはお構いなしに荷物をカウンターに置くと、パツと包みをほどいた。すると、きれいな花がテーブルの上に広がり、いくつかこぼれて床に落ちた。

そのようすを見た周りの客や他の店員が、はっと息をのむ。

コリスはトコトコと冷たいタイルを歩いて床に落ちた花をじっと見つめた。

それは、とても造花だとは思えないくらい生き生きとじていて、まるで息をしているかのようなだった。花たちはすべて淡い光あわを放っている。

「シーリー、これ本当に作ったの？すごいよ」コリスは感嘆かたんしたように言った。

「あの、これを一つ100ペニーで売って欲しいんです。」シーリーが店員に持ちかけた。

店にいた客はみんなシーリーの花に釘付けだ。店員はそれを聞いて驚いたように目を見開いた。

「そんな、これを100ペニーで・・・？や、安すぎます」

店員は恐縮おそくして言った。

「じゃあ、200ペニーで。」

店員は今にも倒れそうだった。お客は値段ねだんを聞いて、もの欲しそうに花たちを眺めている。

コリスはカウンターに飛び乗った。若い店員はちょっとビククリしてのけぞったが、怒りはしなかった。だが、コリスを興味深げに見ている。

猫の部族に子どもが少ないからだ。町でもあまり見かけたりはしない。

コリスは周りの目を身体に浴びながらも、造花の山を眺めるとシーリーに言った。

「これ、500ペニーくらいするよ。僕、買い物したことないですけど、それくらいするの分かるもん」

「え、ええ。坊ちゃんの通りですわ。私はとうてい、200ペニーで買い取ることなど出来ません」

本当に困ったような顔で店員は言った。突然こんなことが起きて戸惑っているようだ。

「え、そうですか？じゃあそれでいいです。わー！コリス君、儲かっちゃんいましたね」

シーリーは心底うれしそうだった。コリスは不思議そうにまだ花の山を見ている。

「は、はあ……。では、今から見ますので少々お時間を取ることになりますがいでしょうか？」

「あ、分かりました。じゃあ私は、しばらくお店の商品を見てます。いつでも呼んで下さいね」

のん気なようすのシーリーに、店員は少しほっとしたように力を抜いた。どことなく緊張している店員たちに、コリスは小さく首をかしげた。

待ち時間の間、二人は店内を見て回った。女の子が喜びそうな小物がたくさん置いてあり、初めて見るコリスには物珍しかった。光に反射するブレスレットやネックレスなどを見てシーリーも楽しそうだった。

「ねえねえ、シーリー。今度これ作ったら？」コリスが前足をあげ

た。

その先には花で出来た髪留めがあった。ゴムに色んな種類の花が飾り付けてある。結構かわいくておしゃれだ。

「そうですね。これも作るのが面白そうですね」シーリーは髪留めを手にとってみた。

「きつとすごいのが出来るよ。それに、これならもっと高く売れるかもよ」コリスはなんとなく乗り気だった。

「そうですね・・・」シーリーはにやりとした。

「あー・・・。」若い店員が恐る恐る口を挟んだ。

「すみません、準備が整いましたので・・・どうぞ」

「あ、はい」シーリーは店員の後を付いていった。

すると、中年の女性店員が「どうぞ」と言ってなにか書いた紙を手渡してきた。コリスも興味津々で覗のぞきこんだ。

「・・・え！」シーリーがそこに書いてあった数字に目を見開いた。

それを見てコリスも驚いた。

紙には、かなりの額が書いてあった。

最近、数字の勉強もし始めていたコリスは、ちゃんとその数字のすごさが分かった。一体、どれくらい作ったんだろう？と疑問に思えてくる。

「あの・・・、なにかご不満でも・・・？」そんな二人に、店員が不安そうに聞いた。

思わず固まっていたシーリーははっとすると、

「あ、いえいえいえ。これで十分です。・・・あの、私が言うのもなんですけど、こんなに貰ってもいいんですか？」

シーリーはビックリしていた。まさか自分が作った花がこんなにも高くなるとは思っていなかったのだ。

「え・・・？あの失礼ですが、これは全て、魔法で作られたお花ですよね？」

店員は確かめるように聞いた。

「はい、そうですけど」「シーリーは戸惑いながら肯定こたへした。

「ならば、お受け取り下さい。本当ならば、もっと値段が上でもおかしくはないのです」

「どうして？」「コリスは聞いた。

「魔法で作られたものですから」店員はきっぱりと言った。

この店員は部族の者ではなく普通の人間だった。力がない人間たちは魔法が使えないので、魔法で作られたものはとても貴重なのだ。

長持ちして壊れにくいし、なによりきれいなので魔法で作ったものは高価だった。

シーリーはちょっとした家計の足しにと思い、軽い気持ちで作っていた。そして、どうせ作るなら魔法で作ったほうがみんな喜ぶだろうと思い、魔法の花を作ったのだ。

暇つぶしに作ったものが高価なものだったとは、全く知らなかったシーリーだった。

「では、これがお渡しするペニーです。」若い店員がお金の入った袋をもってきた。

コリスとシーリーはそれを受け取って店をあとにした。出るついでに、店で少しのお土産も買っていた。アクセサリーを見ていた時に、グローリアに似合いそうなブレスレットをコリスが見つけたのだ。

グローリアの瞳の色によく似た、赤い石が埋めであるシンプルなブレスレットだ。シーリーも白い花がついた髪留めを買った。次に

作るときの見本代わりでもある。

「さあ、パブに行きましょう」「シーリーが機嫌きげん良くいった。

「うん。グローリア、喜んでくれるかな?」コリスがシーリーを見上げた。

「きつと喜びますよ。弟子から貰うものなら、なんでも嬉しいものです」シーリーは微笑んで言った。

パブにはすぐに着いた。コリスたちは店に入ると、すぐに心地よい音楽が耳に入ってきた。店には、落ち着いた木の香りと、ほのかなお酒の匂いがただよっている。

暗い感じではなく、結構明るくておしゃれな感じのパブだ。

カウンターの前にあるテーブルに、グローリアが座っているのが見えた。ふと見ると、グローリアの前にも誰か座っている。近くのテーブルにも猫が一匹いるのが見えた。その他に客は見当たらない。

グローリアたちが店に入ってきたコリスとシーリーに気が付いた。

「グローリア」コリスはたたと走ってグローリアの元へいく。

シーリーもその後を付いていった。

「あっ！お久しぶりです、エリ阿斯様。」

シーリーがグローリアの向かい側に座っている男に気付いて少し頬を染めた。

「ええ、久しぶりですね。シーリー」男は柔らかく微笑んだ。

「エリ阿斯、私の弟子だ。コリス、エリ阿斯に挨拶しろ」グローリアがコリスに優しくそう言った。

コリスはテーブルに飛び乗ると、礼儀正しく座った。座っている男をじっと見つめる。

銀色の長い髪が滝のように腰まで流れ、その表情は穏やかにコリスを見ている。銀の装飾がほどこされた、白い清楚な服を身に纏っていた。

とても落ち着いた優しそうな人とコリスは思った。

「はじめまして、僕はコリスといいます。」

「私の名前はエリ阿斯。とても礼儀正しい子だね、グローリア。」
エリ阿斯はグローリアにいった。

「コリス、私を町に呼んだのはエリ阿斯なんだぞ」グローリアが言

った。

「え、そうなんですか？」 コリスは突然そう言われてエリ阿斯を見た。

「ええ、少し相談に乗ってもらっていたんです。そんなに大したことではないんですが。」

エリ阿斯は苦笑していた。

「ふーん？」 コリスは深くは聞かなかった。なんだか横から鋭い目で見られているような気がしたからだ。

横を向いてみると、そこには不機嫌ふきげんな顔をしたテヴォルトがいた。

小さな影

そのテヴォルトがこっちをじとーと見てくる。コリスは目を瞬いた。首をかしげると、相手も合わせるように首をかしげた。だが、相変わらず茶色の目をこっちに向けている。

なにか言いたそうなのに、何も言ってこないテヴォルトにコリスは戸惑っていた。なにか悪いことでもしたかな・・・？

そのようす見てグローリアとエリアスは微笑んだ。

「テオ、あいさつしなさい。」

エリアスが言う。

だが、テヴォルトはプイツとそっぽを向いて、言うことを聞こうとしなかった。

「おれ、コリスのこと知ってる」

弟子が突然そう言ったので、エリアスは驚いた。

「そつなのか？どこで知り合ったんだ？」

「・・・」

教えてくれないので、エリアスは困った顔をした。エリアスは自分の弟子が言うことをきかないことに、いつも悩んでいた。なぜ反

発するのもよく分からない。実は、エリアスがグローリアに相談していたのはこのことだった。

テヴォルトはそれを知っていて、恥ずかしくてそのことをコリスに知られたくなかったのだ。だからコリスをにらんでいたのだ。た。

コリスは首をかしげてテヴォルトを見ていた。テヴォルトは未だにちよつとムスツとした顔で座っている。

「ん？そうだったのか？」グローリアも初めて聞く話だった。

戦争が終わったあと、グローリアはテヴォルトを見ていない。グローリアが来たときは、すでにテヴォルトが帰ったあとだったからだ。

コリスはこくんと頷いた。

「なあコリス、外で遊ぼうぜ」

テヴォルトはコリスに言った。コリスはきよとんとしたが、すぐに「うん」と嬉しそうに返事をした。

テヴォルトはにっつと笑うと、

「こっちこいよ」とテヴォルトはテーブルを降りるとコリスを振り向いた。

グローリアは微笑ましそうに「たっぷり遊んで来い」と言っている。コリスはふと、キョロキョロとシーリーを探した。あれ？ついさっきまでいたのに。

「シーリーなら向こうで女たちと話しているぞ」

グローリアが察して言った。コリスが目を向けると、店のカウンターで若い女性たちがシーリーと楽しそうに話していた。その中に一匹猫がいるのが見えた。耳と足に模様がある、クリーム色の猫だった。部族の猫だ。

「おい、コリス。はやくこいよ！」テヴォルトが急かすようにいう。

「あ、うん」コリスは素直にテーブルを降りると、テヴォルトを追いかけて行った。

テヴォルトはコリスが来るのを見ると、パツと走って店を出て行く。

「コリス君、テオが色々と迷惑をかけるかも知れないが、根は優しい子だからね。それに、君が来てくれて一番喜んでるのは彼なんだよ」

エリアスがそう言った。コリスは振り返ると、首をかしげながら「はい」と言っ出て行った。

「……グローリア、君の弟子はいい子だね。真面目でかしこそうだ」

エリアスが感心したようにいった。

それを聞いたグローリアは目の前のお酒を飲みながら苦笑した。

「お前、テヴォルトがかわいいんだらう?」

「まあ、そりゃあ自分の一番弟子ですからね。言うこと聞かなくてもかわいいですよ」

出来の悪い弟子ほどかわいい。エリアスはそんな風だった。

「ならいいんじゃないのか?別にそのまま放っておけば」

「それはそれで心配なんですよ。それに、あなた様は私の大先輩なんですから、少しくらい後輩の相談にのってくださいよ。こんなこと言わないとあなたは町に来ないし」

酒ビンをグローリアの杯はいに注ぎながら、エリアスはいった。

「……ん?お前、私を引きこもりかなんかだと思ってるかい?」
グローリアは思わず聞いた。

「みんな思ってますよ」

「ぶっ」グローリアは酒を吹きだした。

「それよりも、森から町に移ってきたらどうですか?みんな喜びま

すよ

「……………」

一方、コリスたちは店の前にいた。

「はあ、ようやく外に出れたぜ」「うんざりしたようにテヴォルトは言った。

「え？」コリスは瞬またたいた。

「まあいいや。遊ぼうぜ！」

テヴォルトにとって、パブの中は居心地ごこちが悪いただけだったので、外に出れてほっとしていたのだ。

実はテヴォルトは、誰かに命令されるのが嫌いだった。それが、たとえ師匠エリマスでも言うことを聞きたくないのだ。

「遊ぶって、なにをするの？」コリスは聞いた。

「お前、まだ魔法使えないよな？」

「え？うん」コリスはまだ魔法を習ってない。

「じゃ、俺が虫を作るから、それ追いかけてようぜ」

そういつてテヴォルトは鼻頭を上につき出した。集中したように鼻先を見つめている。

「え、でも作るって・・・」コリスはきよとんとした。

「見てろ」テヴォルトはそう言いうと、ふっと息を吐いた。

すると、吐かれた空気が鼻先で形を作り、それは美しいコガネムシになった。光を受けて虹のように輝いているコガネムシは、命を吹き込まれたかのように羽ばたいた。

「うわー！」コリスはビククリして目を見開いた。あまりのことに口が塞がらない。

「じゃああっちに行こうぜ」テヴォルトはそう言つと、広間に向つて走った。

コリスもすぐにパツと追いかける。コガネムシは空高く上がり、やがて町の広間につくと、テヴォルトの元へやってきた。

「じゃあ、先に捕まえたほうの勝ちな。」にやつと笑つと、テヴォルトは自分の周りを飛んでいる金色のコガネムシを見た。

コガネムシは合図されたようにジグザグに飛ぶと、コリスの前を通つて飛んでいった。

「まてー！！」

テヴォルトとコリスは走り出した。真ん中にある魔法の噴水ふんすいを通って、宝物のようなコガネムシを追う。

二匹は笑いながら走り回った。

コガネムシが家の屋根の上を飛ぶと、テヴォルトが建物を利用して屋根に登る。コリスは感心してそれを見ていた。

だが、ふとその拍子にある家の窓からこつちを見ている小さな影を見つけた。カーテンのシルエツトで子猫だと分かる。コリスはテヴォルトのマネをして家を駆け上がると、その窓に近づいた。

好奇心がうずいている。コリスはカーテンの隙間から外を見ている子猫に声をかけた。

「ねえ！一緒に遊ぼうよ」コリスがにこにこして言った。

だが、子猫ははっと驚いたようにコリスを見ると、さっとすぐの中に引っ込んでしまった。深い緑色の瞳をした子猫だった。身体はカーテンの影でよく見えなかったが、前足が黄色い色をしていた。

コリスはきつと部族の仲間だと思い、外から中を覗いてみた。

すると、横からひよっこりと出てきた子猫と顔がバツチり合った。どうやらカーテンの横に隠れていたようだった。コリスはビックリして慌てている子猫に「ねえ、」と話しかけた。

「……………」子猫は困ったように耳を下げると、きよるきよると部屋の中を見渡した。

「どうしたの?」おかしなようすの子猫にコリスは聞いた。

すると、窓ガラスの向こうで子猫が言った。

「あのね、僕。いまは外に出れないんだ……。ゴメンね」

申し訳なさそうに言う子猫。きよんとしたコリスは、

「どうして?」

「だって、バルバートが出ちゃ行けないっていうから」と子猫は言った。

「バルバート?」コリスは聞き返した。

「僕の師匠の名前。だから、一緒に遊べないんだ……。ごめん」

そういつて子猫は部屋に戻ろうとした。部屋の中はやけに散らかっていて、床には紙がバラバラと落ちていた。本棚には入りきらない本たちがあふれている。テーブルも同じだった。

「じゃあ、中に入れてよ」

コリスのビックリするような言葉に、子猫はぎよっと足を浮かせた。好奇心で瞳をキラキラさせているコリスに、目をパチクリさせ

た子猫は、少し嬉しそうに笑った。

「おいコリス、ここでなにしてるんだよ」

見ると、テヴォルトが隣に立っていた。

「実はね、ここに僕たちと同じ子猫がいるんだ。だから、話をしたんだよ。」

「ここにだって？そりゃ、変わり者のバルバートの弟子じゃねーか」

「変わり者？」

「ああそうさ。窓をカーテンでさえぎって、ずーっと家に引きこもってたんだ。しかも朝まで明かりが点いてるんで、きつと変なことでもしてるって言われてる。それに、バルバートは一度も弟子を外に出さねえもんだからますます」

「それは僕のせいなんだ・・・」

突然声がした。見ると、テヴォルトの後ろにあの子猫がいた。バナナ色の毛並みをした子猫だった。テヴォルトはとたんに鼻にシワを寄せる。

「お前、外に出れないんじゃないのか？」

「少しくらいならいいんだ。人に見られるところじゃなかったらね・
・」

子猫はちょっと寂しそうにいった。テヴォルトはまだ怪訝けげんそうに
している。

「おいでよ、僕の家以案内するから。もし、嫌じゃなかったらだけ
ど」

と、子猫はテヴォルトを見た。コリスは素直に子猫の後ろを付い
ていく。テヴォルトは、はあとため息をついてからしばらくすると、
後を追っかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8182o/>

猫の魔者

2011年9月29日20時41分発行